

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

奥村 淳
(ドイツ文学・比較文学)

太宰治「走れメロス」(昭和15年5月1日発行「文藝」発表)のいくつかの点について、定説のようになっていること、あるいはあまり問題にされないことについて、あたらしい可能性を提起してみたい。これが以下の拙論のテーマである。

(1)「走れメロス」から「新ハムレット」へ

小田島雄志訳の「ハムレット」の第3幕第2場に次のような台詞がある。ハムレットが劇を演じさせると、義父で国王のクローディアスは憤然と席を立つ。国王毒殺の劇中劇“The Mouse-trap”(ねずみ捕り)を含んでいたからである。残ったのはハムレットとその親友ホレーシオだけである。ハムレットは歌いながらうそぶく。

ハムレット

手負いの鹿は泣き泣き逃げろ、
無傷の鹿は楽しく遊べ、
眠る阿呆に眠らぬ阿呆、
それが浮世というものさ。

どうだ、これなら落ちぶれても役者の仲間入りぐらいはできるだろう。羽飾りをつけてバラの形のリボンを結んだすかし模様の靴でもはけば、りっぱなものだ。

ホレーシオ

ま、役者におなりならば半人前の給料はもらえましょう。

ハムレット

なにを言う、一人前だ、おれなら。
きみ知りたもうや、親しき友よ、
ジュピターにも似た王奪われて、
いまわが国に君臨するは、
女狂いの孔雀王。¹

このハムレットの台詞は筑摩書房「世界文学大系」の「シェイクスピア」では以下のよう

に訳されている。ここでは義父の国王は顔面蒼白となり、よろめいて席を立つ。

ハムレット（計画が凶に当たった喜びに有頂天になって、踊りながら歌う）

手負いの鹿は泣きやんせ、

無傷の鹿は踊りやんせ、

寝られぬ奴に眠る奴、

ほんに浮世はままならぬ。

どうです、君、この調子で、羽飾りでもうんとつけて、それから

薔薇の花リボンを結んだすかし模様のある靴でもはいたら、

どんなに成りさがっても、役者の仲間にはいったら一人まえだな。

ホレーシオ

さあ、半人まえでしょう。

ハムレット

いや、立派に一人まえだとも。

知らぬか、お主、デーモンさんや、

ジョーヴの神が追っばられて、

今この国をおさめる奴は

とてもたまらぬ—ひひおやじ。²

小田島訳の「君知りたもうや、親しき友よ」は三神訳では「知らぬか、お主、デーモンさんや」となっている。三神訳の「ジョーヴの神」とは聞きなれぬ名前であるが、それは小田島訳によってローマ神話の「ジュピター」のことと知れる。しかし「デーモンさん」がなぜ「親しき友」となって、なぜこの名前が親しい友人の代名詞になるのかは不明である。

この部分の原文は以下である。（研究社英文学叢書、大正11；主幹岡倉由三郎、市川三喜による）

Hamlet : Why, let the stricken deer go weep,

The hart ungalled play ;

For some must watch, while some must sleep :

So runs the world away.

Would not this, sir, and a forest of feathers —it

the rest of my fortunes turn Turk with me—with two

Provincial roses on my razed shoes, get me a

Fellowship in a cry of players, sir ?

Horatio : Half a share.

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

Hamlet : A whole one, I.

For thou dost know, O Damon dear,

This realm dismantled was

Of Jove himself ; and now reigns here

A very, very—pajock.

「ジョーヴの神」は Jove であり、古い英語の表現とわかる。そして「デーモンさん」が“O Damon, dear”であると知れる。Damon を「デーモン」（三神訳）とではなく、ダーモン（ダモン）とドイツ語読みするならば、にわかになそれが太宰治「走れメロス」と関わっていることが認識される。「走れメロス」は「走れダーモン」³であったかもしれないと言われるからである。

太宰治は昭和16年7月2日に文藝春秋社から「最初の書き下ろし長編小説」（4, 385）⁴である「新ハムレット」を発行した。冒頭の「はしがき」に「作者も、此の作品を書くに当り、坪内博士訳の『ハムレット』と、それから、浦口文治氏著の『新評註ハムレット』だけを、一とほり読んでみた。浦口氏の『新評註ハムレット』には、原文ものっているので、辞書を片手に、大骨折りで読んでみた。いろいろの新知識を得たやうな気もするが、いまそれを、ここでいちいち報告する必要も無い。」（4, 127以下）とある。やさしいとは言うことはできないシェイクスピアの原文を読んだというのである。評註書を傍らにとはいえ、端倪すべからざる太宰の英語力である。

最初に引用した部分は浦口の評註本では以下のように訳されている。（上段に原文がおかれ、それについての評註が下段である。）

君も知つとろ、大事なデーモン君、
この王土から追立てられたは
ジョーブ王；代つて今の統治者は
本式ほんとの —— 孔雀どの。⁵

これに関する評註は以下である。「Damon と Pythias とは紀元前四世紀の初め頃、地中海 Sicily 島東南部の都 Syracuse の名高い刎頸の親友、支那の所謂管仲鮑叔式の交友である。Hamlet が Horatio を Damon に喩へたのは此等の二友比較の結果ではなくて、寧ろ O Damon dear という口調からであらう。・・・以上の四行もまた当時流行の ballad よりの引用か、またはその一部分の作り換へあらう。」⁶ 太宰がここで言われている Damon（デーモン）と Pythias のことが、自作のメロスとセリヌンティウスのことであると気がつかなかったはずはない。坪内逍遙訳では「知らずや御身デーモンどの」⁷とあるだけだが、浦口の評註本が「デーモンどの」の真

相を教えたのである。「いろいろの新知識」のひとつはこれだったに違いない。

「新ハムレット」は「走れメロス」とネガとポジの関係にあるように思われる。たとえば「新ハムレット」において新王クローチヤスに先王毒殺の噂が立つ。クローチヤスは先の王でハムレットの父の弟である。彼は噂を否定するが、しかし実は一度毒殺を決心したことがあると告白する。全面否定するよりも、かえって王の言うことの信憑性は増す。新王は疑うハムレットに対して「それほど疑ふなら、わしも、むきになつて答へてあげる。ハムレット、あの城中の噂は、事実です。いや、わしが、先王を毒殺したといふのは、あやまり。わたしは、ただ、それを決意した一夜があつた、それだけだ。先王は、急に病気でなくなられた。」

（4，262）これは「走れメロス」のメロスとセリヌンティウスの告白に対応している。メロスとセリヌンティウスは互いに信じあつてはいたが、しかしそれぞれ一回ずつ疑念を抱いたことを告白しあう。末尾近くの＜感動的＞な箇所である。

「セリヌンティウス。」メロスは眼に涙を浮べて言つた。「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴つてくれなかつたら、私は君と抱擁する資格さへ無いのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴つた。殴つてから優しく微笑み、

「メロス、私を殴れ。同じくらゐ音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たつた一度だけ、ちらと君を疑つた。生れて、はじめて君を疑つた。君が私を殴つてくれなければ、私は君と抱擁できない。」

メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴つた。

（3，177）

「一夜」と「一度」という数字が共通するばかりか、「新ハムレット」の新王の正直めいて実は偽善の告白とメロス、セリヌンティウスの真正な正直さは、裏表の関係にある。ネガとポジの関係とする理由である。以下ではしばらくこのことを中心にして、シェイクスピア「ハムレット」と「新ハムレット」の関係について考察する。

「新ハムレット」のハムレットは作品の前半において若々しい。寒がりのホレーショーには「今夜はこれでも暖かいほうだよ。」（4，157）と言うほど健康であり、城に幽霊が出ると言われると、「それあまた、ひどい。ホレーショー、本気かね。僕は、笑つちやつたよ。ばかばかしい。」（4，162）と笑い飛ばす。悩まない。このようなハムレット像は「メロスは、単純な男であつた。」（3，165）につながっている。またメロスをポジとすれば、ホレーショーはネガと言ってよいだろう。

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

浦口文治の「新評註ハムレット」は副題“Shakespeare’s Hamlet / as seen by the Elizabethan Audience”（エリザベス朝観客から見て）が示すように、現代の受容文学論の先駆けをなすものである。「自序」が「エリザベス朝の観客から見て」の意味を明らかにしてくれる。「ハムレット」の God, Man, Nature そして Society についての主張は「Elizabeth 朝の社会的背景中より引き出してみると、その中身が我々現代人にとつての人生問題にまた痛切に適用し得られるし、更に一步を進めて論理的にそれを引き伸ばしてみると、それが世界今後の社会問題の根底観念にもまた当て嵌め得られるであろう。」⁸ 浦口はハムレットを悩める青年とはとらない。ハムレットは「若さ、強さ、屈託なさ」⁹の持ち主であり、「毛頭意志薄弱病者ではなかつた。」¹⁰というのがその考えである。太宰がハムレットは太っていたと考えて「アッ、ハ、ハ、ハー」¹¹と笑った心理はここにある。原文の母なる王妃の“*He’s fat, and scant of breath.*”の fat が太宰の目を捉えたのである。（浦口は fat を体格ではなく、人格に関連させているが。）快活で意志の強いハムレット像は太宰にとって新鮮であった。浦口は「ハムレット」に作者シェイクスピアによる当時の世相、「法律の買収、正義の押しのけ」¹²という社会の不正義への批判的側面を見ている。

太宰は相当真剣にこの評註書を読んだと思われる。「新ハムレット」においてハムレットは「風采もあがら」（4, 130）ない義父の王を「山羊のをぢさん」（4, 137）呼ばわりする。それは王も公認である。ところがシェイクスピア「ハムレット」に「山羊のをぢさん」は登場しない。太宰は浦口「新評註ハムレット」からこの着想を得たらしく思われる。

「本式ほんとの —— 孔雀どの（A very, very—pajock.）」という台詞について「pajock は peacock の訛りだといふ説が多い。」とする浦口は、さらに「A very, very まで歌つて来て、彼がそこで避けてゐるのは ass（筆者注：ロバ）である。この言葉は was との押韻上、当時の何人にも容易に豫想し得られた。それを pajock に代へたのは彼の例の頓智 — 對話の最後をひらりとかはして相手の意表に出るといふ才気の迸りである。・・・今一步踏込んで云へば、叔父奴も鈍馬だ — あの大秘密の化けの皮をこんなに脆くもはがされるとは愈々 a very, very ass だなといふ智慧くらべ上の軽蔑心が彼の胸中に湧きあがつたらしい。」¹³（文中の was については引用の原文参照）

山羊やロバは狼などと並んでメルヘンの世界ではおなじみの動物である。グリムの「おせんや御飯のしたくと金貨をうむ驢馬と棍棒ふくろからでろ（Tischendeckdich, Goldesel und Knüppel aus dem Sack）」（KHM36：岩波文庫の訳題）の前半の主役は山羊である。この山羊は「意地悪（boshaft）」¹⁴である。「イソップ寓話集」の「ろばと山羊」における山羊も同じ要素がある。ろばは仕事がいへんなのでよい飼料をもらっている。山羊はそれを嫉んでろばをだますが、逆に自分がいのちを失う破目になる。「これは、すべて他人に対して悪計を企む者はかえって自ら自分の不幸を招く者となる、ということなのです。」¹⁵ 雄の山羊はキリスト教

世界では好色や罪人や強欲をあらわす。新王も見方によってはこれによくあてはまる。「ass（ロバ）」（シェイクスピア）から「山羊」（「新ハムレット」）へ至る連想はあり得る。

「新ハムレット」でハムレットが叔父である新王について、「もとをただせば、山羊のをぢさんさ。お酒を飲んで酔つぱらつて、しょつちゆうお父さんに叱られてばかりゐたぢやないか。僕をそそのかして、お城の外の女のところへ遊びに連れていつたのも、あの山羊のをぢさんぢやないか。あそこの女は叔父さんの事を豚のおばけだと言つてゐたんだ。」（4, 142）太宰が浦口文治の評註書によってロバに着目し、山羊へと連想がはたらいたことはおおいにありえることのように思われる。動物のイメージはメルヘンに属するからである。

「新ハムレット」では一箇所だけ「ハムレット」原文がそのまま引用されている箇所がある。第一幕第二場のハムレットと義父王の会話である。ポローニヤスの息子レヤチーズのフランス遊学が王によって許可される。ハムレットも内心ドイツの大学に戻りたい。王はレヤチーズに対しては鷹揚な態度を見せ、ハムレットに対しては「さて、ハムレットよ、甥と呼うだは前の日、今はわが子……」¹⁶と呼びかける。ハムレットの反応は“A little more than kin, and less than kind.”と応える。坪内訳は「(後を向いて) 親族以上なれど、肉親(しんみ)とは思はれぬわ。」¹⁷である。わざわざ原文をそのまま引用する必然性は感じられない。太宰がハムレットの傍白を原文のままに引用したことには、なにか特別な理由が存在したはずである。これは太宰の肉親意識の表出と見なすことができる。

太宰は「肉親」という言葉に人並み以上に敏感であった。たとえば昭和10年12月17日付け小館善四郎宛手紙の冒頭に「先づ、肉親のあくことを知らぬドンランなるエゴを知れ！」（11, 65）という葉書がある。その日付は当時世間の話題をさらっていた<日大生殺し>事件が一斉に新聞に報じられた日である。両親と妹による<不良>学生の殺人事件である。日本で最初の保険金殺人とされる。昭和17年、太宰はこの事件を素材として「花火」を発表した。¹⁸小山清が「花火」の主人公勝治がよく描けていると言ったところ、太宰は「あれは僕だよ。僕の身内のもは僕のことを死んでくれたらいいと思つてゐたに違ひないんだ。」¹⁹と即座に答えたという。少年ならばともかくこの年齢の人間の言う言葉ではない。それは太宰の「身内」意識の表出である。太宰のハムレットの微妙な肉親意識は「走れメロス」におけるメロスの家族（妹）への一途な思いと対照的である。ハムレットとメロスはここにおいてもネガとポジの関係を構成している。

「走れメロス」は主人公の正義感ぶりが目立つ。それは「新ハムレット」ではポローニヤスに投影されている。ハムレットが「わかつた、わかつた。ポローニヤス、あなたは、いかにも正義の士だよ。見上げたものです。けれども、自分ひとりの正義感が、他人の平穏な家庭生活を滅茶滅茶におちこはす事もあります。」（4, 222）と言うとき、作者の念頭には「走れメロス」のメロスの<正義>の行動が意識されているのではないか。

メロスは言葉の真の意味で「正義の士」である。「邪悪に対しては、人一倍に敏感」（3, 164）であり、「単純な男」（3, 165）である。メロスはようやく妹を結婚させるとシラクスの町に向かって走り出す。「さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出した。私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救う為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。」（3, 170）途中山賊に襲われる。「気の毒だが、正義のためだ！」（3, 172）とメロスは山賊を棍棒で殴り倒す。メロスは友の「信頼」（3, 174）に応え、「真の勇者」（3, 175）として、「正義の士」（3, 175）として死ぬ覚悟である。ここで言われる「正義」は文字通りの「正義」である。おそらくそういう要素がたとえば「走れメロス」は「不自然で嫌らしい」²⁰といった感想を呼ぶのであろう。

「新ハムレット」でも正義という言葉が目立つ。しかしそれは「走れメロス」とは反対の意味を与えられている。「走れメロス」の悪対正義のような絶対的なものとはされていない。ポローニヤスの正義感あふれる言葉に対するハムレットの懐疑的な反応がよくそれを示している。ポローニヤスの企てる国王毒殺の朗読劇は「正義ごっこ」（4, 223）としか思われない。井伏鱒二は「新ハムレット」について「この作品に登場する人物は、たいていみんな善良である。しかも至るところに悲劇が生じ、また大きな悲劇的結末が約束されてゐる。相寄るものが善良なるが故に毎度ながら悲劇が生じるといふことは、大いに有り得ることである。」²¹と説明している。よく作品の本質を見抜いたと言うべきであろう。太宰自身もクロウヂヤスについて「昔の悪人の典型とは大いに異り、ひよつとすると気の弱い善人のやうにさへ見えながら、先王を殺し、不潔の恋に成功し、さうして、てれ隠しの戦争などをはじめてゐる。私たちを苦しめて来た悪人は、この型のおとなに多かつた。」²²として、「近代悪」の表出としている。やはりネガとポジの関係である。

「走れメロス」と「新ハムレット」は次の点においても関連が指摘できる。

「新ハムレット」においてポローニヤスが先王毒殺の噂について現王クロウヂヤスを詰問する。現王はポローニヤスの娘オフキリヤの妊娠問題であるかととほけてみせる。ポローニヤスは次のように反応する。「おとほけなさつては、いけません。オフキリヤの事など、いまは問題でございません。それはもう、解決したも同然であります。わしのいまお伺ひ申してゐるものは、もつと大きく、おそろしく、なかなか解決のむづかしい問題でございます。」（4, 238）それは「先王の死因」（4, 238）についての問題である。

ところが「走れメロス」においても先に同じ言葉が使用されている。石工セリヌンテイウスの弟子フィロストラトスにメロスが言う言葉である。まずフィロストラトスがメロスに対して懇願する。セリヌンテイウスはあくまでメロスを信じている。しかしもう間に合わないから走るのはやめて、メロスは自分の命を大事にしてもらいたい。メロスは言う。「それだから、走るのだ。信じられてゐるから走るのだ。間に合ふ、間に合はぬは問題でないのだ。人

の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もつと大きい大きいものの為に走つてゐるのだ。ついて来い！ フィロストラトス。」（3, 176）「走れメロス」は発表から一ヶ月半後の昭和15年6月15日発行の単行本「女の決闘」（河出書房）に収録された。その時この部分に変更があった。「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの為に走つてゐるのだ。」²³である。「もつと大きい大きいものの為」から「もつと恐ろしく大きいものの為」への変更である。それはほぼ一年後の「新ハムレット」のポーロニヤスの台詞を予告するかのような変更になっている。メロスは「大きいものの為」に走る。それは「解決のむづかしい問題」なのだ。

以上のように「走れメロス」と「新ハムレット」は密接な関係を有しており、ネガとポジの関係にある要素もひとつではない。「走れメロス」は「新ハムレット」の登場人物の性格設定におおいに貢献したのである。

（2）「走れメロス」の典拠について

「走れメロス」が典拠したものについて検討する。「走れメロス」の末尾には次のように書かれてある。「（古伝説と、シルレルの詩から。）」（3, 178）

「古伝説」は「主役 Möros と人質 Selinuntius との物語である、Hyginus の„Fabel“だと考えておくのが妥当だろう。だが当時日本語訳がなかったと思われる古伝説=Hyginus の„Fabel“に、太宰がどのようにして接したのかは、まだ明らかにされていない。」（3, 423：「解題」）『シルレルの詩』とはバラード„Die Bürgschaft“（保証）であり、これについては「太宰治が『走れメロス』を執筆する際に、直接参考にしたのは、現段階では、・・・小栗孝則訳『人質 譚詩』と、同じ『新編シラー詩抄』巻末に掲げられた『注解』の・・・記述とであった可能性がよい。」（3, 432：「解題」）とされる。このバラードについては後述するが、以上は＜定説＞としてよいであろう。「作品の典拠の古伝説とシルレルの詩についてはほぼ見解が出ているので、今後はどのような改変が行われたのか、テーマとの関連で深められるとよいであろう。」²⁴という説明も＜定説＞を踏まえたものと解釈できる。また「シルレルの詩」について「太宰が依拠したことが確実視される小栗孝則訳『人質 譚詩』（『新編シラー詩抄』改造文庫、昭和12年）」²⁵という説明も＜定説＞に基づくものである。

しかし最近までは Hyginus とその„Fabel“について少し分明でないところがあった。集英社世界文学大事典（1997）にヒュギヌスの項目がふたつあることがそれを示している。「ヒュギヌス Hyginus：2世紀頃 ローマの神話収集家。もとの題名は『系譜集』Genealogiaeで、16世紀の初版本以来『神話集』Fabulaeとして知られている神話に関する手引書を著した。ギリシャの原典をもとに編集したもので、神々と英雄たちとの系図と277の短い神話物語および一覧表からなるが、後代のたび重なる改作や挿入のために今では原文が確定できない。（以下略）」

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

(岩崎務)そして「ヒュギヌス ガイウス・ユリウス Gāius Iūlius Hygīnus 前64頃―後17頃
ローマ帝政期の学者。スペインの人。一説によるとユリウス・カエサルによってアレクサン
ドリアから奴隷として連れてこられたという。オウィディウスの友人で学問的には彼の師に
あたる。前28年ごろアウグストゥスによって解放され、その博覧強記を見込まれて、新たに
設立されたパラティヌス図書館の初代館長に任じられた。しかし彼は一生クロディウス・リ
キニウスの援助を受け、死んだ時貧しかったといわれる。彼の著書は次の4分野にわたる。

(中略)さらにヒュギヌスという名のもとに『天文学』『神話集』が伝わる(前項ヒュギヌス
参照)。(以下略)」(岩谷智)

時代を別にして二人のヒュギヌスが存在していて、「神話集 (Fabel)」の著者に関してはい
ずれのヒュギヌスであるかははっきりしないことになる。この状況は太宰治の時代にもあて
はまるわけである。

この疑問は近年、“Fabulae”が講談社学術文庫に「ギリシャ神話集」として収録されたこと
によって解決をみたようである。その「解説」に次のように述べられている。「昔から『ギリ
シア神話集』(Fabulae)の著者として、ガイウス・ユリウス・ヒュギーヌスという名前が取
り沙汰されてきた。三つぞろえの立派なローマ人の名前であるが、これがこの本の著者であ
るとは確信できない。伝統的にヒュギーヌスの作品と名指されてはいるが、これはいわば便
宜的な方法にすぎず、このヒュギーヌスがどんな人物だったかという、まるで謎につつま
れたままなのである。」²⁶そしてヒュギーヌスの人物像としては結論として「結局は確定的なこ
とは誰にも分からない。・・・いつと確認できない時代に(おおむね2世紀とされる)誰と
も確認できない作家(おそらくヒュギーヌスという名前の人)によって、ギリシア神話物語
の寄せ集めが作られた。というあたりで、現状における著者論とせざるを得ないようである。」²⁷

ヒュギーヌス「神話集」第257話の中心に置かれた話が、太宰の言う「古伝説」に関わっ
ている。そのまま引用する。

「257 勿頸の交わりを結んだ者たち

(中略)シキリアでは、暴君ディオニューシオスがこの上もなく残虐であり、市民たち
を責め殺したので、モエロスは暴君を殺そうとした。衛兵たちが武装している彼を捕ら
え、王のもとに連行した。彼は尋問されると、王を殺そうとしたと答えた。王は彼を磔
にするよう命じた。モエロスは姉妹の結婚のために三日の猶予を王に求め、自分が三日
目に戻ってくる保証人として、友人であり仲間であるセリーヌンティオスを王に差し
出した。

王は彼に姉妹のための猶予を認め、もしモエロスが定められた日までに戻ってこなけ
れば、その友が同じ罰を受けるのだとセリーヌンティオスに宣告してモエロスを釈放
した。彼が姉妹を結婚させて戻るときに、突然雨嵐が生じ、歩いて渡ることも泳ぎ渡る

こともできないほど川が増水した。モエロスは川岸に座り込み、友が自分の身代わりに死ぬのではないかと泣きはじめた。

さて、既に三日目の六時間が過ぎたのにモエロスが戻ってこないのも、パラリスがセリーヌーンティオスを磔にするよう命じると、セリーヌーンティオスはまだ三日目は過ぎていないと答えた。既に九時間が過ぎたので、王はセリーヌーンティオスを磔柱まで引いていくよう命じた。彼が引かれてくると、やっこのことで、ついにモエロスが川を渡り、刑吏に追いついて遠くから叫んだ。『役人よ、待て！彼が保証してくれた者はここにいる。』

このことが王に知らされると、王は二人を自分の前に連れてこさせ、彼らに自分を友として受け入れるように懇願し、モエロスの一命を助けた。²⁸

モエロスすなわちメロスである。ディオニューシオス王は「この上もなく残虐」で、市民を「責め殺」す「暴君」として描かれている。＜定説＞の「Hyginus の „Fabel“」とは以上のようなものであるが、ただ太宰が具体的にはどのような形でそれを知ったのかということとはわからないままである。原書なのか翻訳なのか、それともなにか概説書のようなものなのか。

この「古伝説」はキケロ（Marcus Tullius Cicero；紀元前106-43）の著作にも出ている。キケロが息子に宛てた書簡の形式をとった「義務について」である。その「十」は有益性は徳性を伴うべきことを教えるもので、三つに分けられた最後の部分がデーモンとピンティアースの話である。

「さて、もっとも大きな混乱が起きるのは友情に関する義務である。この場合、与えることが正しいはずのものを与えないことも、また、与えることが公正でないものを与えることも義務に背く。しかし、このような場合、全般についての教えは短くすみ、難しくはない。すなわち、有益だと見えるもの、公職や富や快樂やその他この種のものを決して友情より優先しないことである。と同時に、良識ある人物なら国家に背くこと、誓約と信義に背くことまでも友人のために行いはしないであろう。たとえ友人を裁く裁判官となってもしないであろう。なぜなら、裁判官の役割を帯びるとき友人の役割を捨てるからである。友情に譲るものと言え、友人の申し立てのほうが真実であるようにと望み、陳述の時間を法律の許すぎりぎりまで使わせる、ということだけであろう。誓いを行った上で述べねばならないときに裁判官が思い起こすべきは、神が、つまり、私の考えでは、己の精神が証人として控えている、ということである。精神こそ神自ら人間に与えたもっとも神々しいものだからである。かくして、われわれは祖先からたいへん素晴らしい慣習を受け継いだ—この慣習をわれわれは保持できていればよいのだが。すなわち、裁判官に対し、

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

『信義を破らずになしうることを』請求したのである。この請求の眼目は何か。それは少し前に私が述べたような徳性に背かず友人に対し裁判官が譲りえることである。友人が欲するすべてがなされねばならないとすれば、そのようなものは友情ではなく、共同謀議とみなされるべきである。しかし、いまの私の普通の友情についてである。というのも、知恵に優れた完璧な人物の場合にはこのようなことはまったくありえない。ピュータゴラス派のダーモンとピンティアースについてお互いの心のつながりを伝える話がある。すなわち、二人の友の一方に対し僭王ディオニューシオスが死刑執行日を決定したのち、死を言い渡された者は身内のことを託してゆくのに数日の猶予を求めたが、このとき、もう一方の友が出頭の保証人となった。つまり、もし友人が戻らなければ自分が死なねばならないのであった。友が当日に戻ってきたとき、二人の信義に感心した僭王は自分を友情の輪の三番目に加えてくれるよう求めた。それゆえ、友情において有益に見えることを徳性を有することと比較考量するとき、見かけの利点にとらわれず、徳性の力を発揮させるべきである。しかし、友情において徳性に反することが要求されるときは敬神の念と信義が友情より優先されねばならない。そうすれば、われわれが求めるとおりの義務の選択がなされえるであろう。』²⁹

キケロー「トゥスクルム荘対談集」においてもダーモンとピンティアースのことが言及されている。ディオニューシオス王のことが述べられている部分である。

ディオニューシオスは、25歳で支配権を掌握から38年もシュラーケーサイの僭王であった。ディオニューシオスは、立派な両親をもち、高貴な家柄の出であった。同時代の人々の多くと親交を結び、親類との交誼に厚かった。その上、ギリシア流に幾人かの若者を恋人にしていた。しかし彼はその誰をも信用できなかった。床屋に首を任せることをしないで自分の娘に髭剃りを教えて鬚を剃らせた。娘が大人になると、この娘から剃刀を取り上げ、胡桃の殻を熱したもので鬚と髪の毛を焼くように教えた。夜に妻のところに行く際は十分に周囲を警戒した。寝室の周囲には広い溝が巡っており、木の小橋しかなかった。寝室の扉を開けると、その橋を外した。また、共同の演壇に立つことはせず、高い塔から演説するのが常であった。王の異常な猜疑心を伝える「20」に続く「21」は、いわゆる<ダモクレスの剣>の逸話である。そして「22」で友情を欲するディオニューシオス王に関わって、二人の人間のことが言及されている。

「だが、友情の裏切りを恐れる一方で、どれほど友情を切望していたかを、二人のピュータゴラス派の人間の出来事で彼は明らかにした。彼は二人のうち的一方を死刑の保証人として受け入れ、もう一方が定められた処刑の時間に保証人を解放す

るために現れたとき、『君たちの三番目の友として私を加えてもらうことができればなあ!』と言った。』³⁰

「二人のピュータゴラス派の人間」とは「義務について」のダーモンとピンティアースに違いなく、ディオニューシオス王は友情を希求する人物として描かれてある。

「走れメロス」の「古伝説」は西欧では文字通り古くから広く伝わっていた。シェイクスピアは「貴族や学のあるインテリの観客と同時に、平土間の観客をも楽しませよう」³¹としていたとされるが、観客は Damon デイモンと聞いただけで、“Damon and Pythias friendship”すなわち「刎頸の交わり」を連想できたのだ。浦口はイギリスでは「流行の ballad」になっていたらしいと言う。しかし太宰と「古伝説」Hyginus のつながりを考える時、「古伝説」についての知識が具体的にはどこからのものかは不明である。「走れメロス」の人間不信で、残虐な王の姿はヒュギーヌスにもキケロにも共通する。途中の経過はヒュギーヌスによく添っている。しかし友人の間の信義とそれに心を動かされる国王の姿はヒュギーヌスよりはずっとキケロに近い。いずれにしる「古伝説」を「Hyginus の„Fabel“」にのみ限定することはできないようである。

(3) シラーのバラード「保証 (Die Bürgschaft)」(「人質」)の典拠について

太宰の「走れメロス」がシラーのバラード「保証 (Die Bürgschaft)」に基づいているというのは<定説>である。(ドイツのランゲンシャイト社の英独・独英辞書に従えば Bürgschaft は英語では guaranty である。)シラーがヒュギーヌスの神話に基づいたというのも同様である。シラーはゲーテのおかげでヒュギーヌスの逸話を知ったとされるが、その経過は次のようなものであった。シラーはヒュギーヌスを全く知らないわけではなかったのである。

シラー (Schiller, 1759-1805) とゲーテ (Goethe, 1749-1832) はドイツ文学の古典期を形成したが、古典期のみならずドイツ文学を代表する存在である。文学的な本質は水と油の関係のようなどころがあるが、しかし文学を通した友情には深いものがあった。シラーは1794年5月から歴史教授としてイエーナに住み、その年の9月にゲーテをワイマールに訪問した。ゲーテはワイマール公国の大臣である。1796年には共同で文藝誌「クセーニエン (Xenien)」を編集し、それは一年後に「詩の女神の年鑑 (Musenalmanach)」となる。二人の交友は深まり、ゲーテは足しげくイエーナに通った。(ワイマールとイエーナの距離は22、3キロである。)シラーの家で談笑する二人の声が大きすぎて、シラーの妻は安眠ができないとこぼしていたということが伝わっている。シラーが1799年12月に家族ともどもワイマールに移住した後は、ドイツ文学の古典主義の頂点となる期間が形成されることになった。

シラーはゲーテに対して1797年12月15日付けの手紙で素材の不足を嘆く。シラーは手紙の冒

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

頭で、二人に共通の知人である女流詩人が来たのでゆっくり書けないことわった後、当時の文筆家ヴルピウス（Vulpius）の論文を批判する。（ヴルピウスの妹クリスティアーネはのちゲーテの妻となる。）「それはあまりに乾燥しすぎていてあまりに貧相、そして引用と歴史の博覧知識の無用のオンパレードにもかかわらず、出来事を解明するあるいは少しでも興味を引くいささかの意味ある新味を含んでいません。しかしなにか実をあげようというのであれば、その意図は恐らく自分で集めたものによってよりは、むしろ雑誌の記事が達成させてくれるでしょう。・・・誰かが昔の本に文学の素材探しに出かけることを思いついたらよいのです。そしてその際、それ自体はありそうにない出来事において『跳躍点』を発見するという正常な感覚があればよいと私はよく思ってきました。私にはそういう源泉は全く思い浮かびません。そしてそういう素材の不足は、素材が全くないような場合よりもいっそう私の創作を実際に不毛にしています。ヒュギーヌスとかいうギリシア人が、かつて、詩人 からかあるいは詩人の使用のためにいくつかの悲劇的な逸話（Fabel）を収集した気がします。そういう友人なら私はうまく使用できるでしょう。」³² シラーの欲求は歴史知識の羅列ではなく、歴史上の出来事の真実を解明したいところにあった。「跳躍点（springender Punkt）」とは事実の核心を意味する。

ゲーテは翌日ヒュギーヌスのラテン語の本をシラーに送る。ワイマールの自宅には広い図書室があったのだ。そしてシラーは受け取って半年以上たった1798年8月28日のゲーテに宛てた手紙でヒュギーヌスについて触れている。その手紙は二人の親密な交友を伝えていて興味深いものがある。シラーは冒頭ゲーテの誕生日をワイマールまで出かけて祝福しようとしていたのに寝坊してしまい、体調もよくないのであきらめたと詫びている。（ゲーテの誕生日は1749年8月28日）さらに最近哲学者フィヒテが突然に訪れてきたことも伝えている。「あなたによくギリシアの格言について起こること、その幸福を今や私に対してヒュギーヌスの逸話集がもたらしてくれています。ちょうど読破中なのです。詩的な精神を元気づけてくれるこういうメルヘンの人物の間を逍遥することは本当に楽しいものです。・・・悲劇詩人のためのいくつものすばらしい素材が含まれていますが、・・・」³³ シラーは前日に「保証（Die Bürgschaft）」の創作を始めていた。このバラードは8月30日には完成された。手紙の「幸福」とは「保証」のことであろうし、もしかしたら「保証」の執筆が「寝坊」の原因かも知れない。

9月4日（火曜日）付けの手紙では「保証」のことを次のように述べている。「もうひとつの物語はあのヒュギーヌスが持って来てくれたものです。この素材に潜むすべての主題をちゃんと見つけ出したかどうか心配です。あなたの胸にもなにか主題が浮かぶかどうか考えてください。・・・私は目下ひどい風邪ですが、何もなければ木曜日にかがうつもりです。／また会う日をこころから楽しみにしております。ごきげんよう。妻があなたからください

た普段草をお見せしたいそうです。それは今とても美しく咲いています。』³⁴ シラーは完成したばかりの「保証」と「龍との戦い（Kampf mit dem Drachen）」を手紙に同封した。ゲーテは早速二つのバラードの感想を書き送る。「明日お目にかかれることを期待して少しだけ書きます。ふたつともとても成功しています。・・・『保証』において雨の日に川からやっと脱出できた人間なのに、喉が渴いて死にそうになるというのは生理学上あまりありえないのではないのでしょうか。その人の服はまだすっかり濡れているかも知れませんが。しかし事の真相は別として、また皮膚の吸収のことを考えなくとも、喉の渇きという発明と心理状態はここではすっかりうまい具合になっているわけではありません。主人公自身から発するもうひとつの巧みなモチーフは私には代わるものが思いつきません。外からの、すなわち自然の事象と人間暴力によるモチーフの発見は本当にすばらしいです。』³⁵

メロスの喉の渇きについて疑問を呈するとは自然科学者でもあったゲーテらしいことである。「走れメロス」ではメロスの喉の渇きが明確には描かれていないことが注目される。

「保証」は「詩の女神の年鑑1799」に掲載された。ゲーテとシラー共同の雑誌である。「保証」の主人公の名前はメロス（Möros）であるが、身代わりとなる友達の名前は出てこない。小栗孝則「新編シラー詩抄」において「保証」は「人質 譚詩」と訳された。そしてメロスの「友達」に対する「注」の部分に「傳説ではセリヌンティウス Selinuntius といふ名の男。』³⁶ とある。小栗のいう「傳説」とはキケロではなく、ヒュギーヌスのことであると知られる。太宰が自分の小説の主人公の名前をメロスとセリヌンティウスとしたのはそれに従ったことになる。（ちなみに「保証」を「人質」と最初に訳したのは、明治26年、巖谷小波と思われる。）³⁷

シラーがゲーテに宛てた素材の不足を嘆く手紙で「ヒュギーヌスとかいうギリシア人」という書き方をしたのにも理由があった。ヒュギーヌスの「神話集」を全く知らないわけではなかったからである。ドイツの文筆家フーバー（Ludwig Ferdinand Huber）の書いたものに「保証」と内容を同じくするものがあった。フーバーは1786年に記事「現代の偉人について（Ueber moderne Größe）」を文芸誌「ターリア（Thalia）」に発表した³⁸が、この論文中にダーモンと友人のことが出てくるのである。「ターリア」はシラー自身が1785年に創刊した総合文芸雑誌であり、1786年版の巻頭に置かれたのがシラー「歓喜に寄す（An die Freude）」である。フーバーの記事がそれに続くのであるから、シラーがこの記事を読まなかったはずはない。

フーバーが伝えるのはフランスの田舎のデュブライユとペシュメジャという二人の仲のよい幼なじみの話である。ふたりは将来同じ家に住むことを約束していたが、パリでそれは実現される。年長のデュブライユは医師となり、ペシュメジャは文筆家となった。二人は同じ家に住み、共同で慈善事業も行った。ふたりのことはパリで評判となり、ペシュメジャが歴史詩の本を出版したことでいっそう注目を集めた。詩の内容から二人の結びつきを読み取ることは容易であった。本の「全体は古代ギリシア・ローマの趣きがあって、それは読者をすっ

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

かりギリシアの偉人のたいへん昔の時代に移してくれるものであった。・・・ペシュメジャは友情というものの強く賞賛されるべき特徴のひとつを古代ギリシアから借りて利用した。自分と友人をダーモン (Damon) とピトウラス (Pithlas) にたとえて、この美談をひとつの織物にした。³⁸本の発行後まもなくデュブライユがなくなり、その2週間後にはペシュメジャもまたなくなった。看病していた友の病気に感染したのである。二人の友情は死後、ますます評判をさらったというのが、フーバーが伝えた友情の物語である。ダーモンとピトウラスの話がヒュギーヌスに由来するということは明示されていない。しかしシラーはこれをきっかけにして「ヒュギーヌスとかいうギリシア人」のことを知ったと考えられる。

ヒュギーヌス「神話集」では主人公はモエロスとセリヌンティオスである。同じ主題を扱ったキケロ「義務」ではダーモンとピンティアースが主人公となっている。同じ逸話はヴァレリウス・マクシムス (Valerius Maximus) の「記憶すべき行為と言葉 (Factorum et dictorum memorabilium libri novem)」にも出ている。それは中世においてラテン語教科書として人気があったが、ここではダーモンとピンティアースとなっているという。³⁹マクシムスは紀元一世紀の人とされ、著作はキケロを源泉のひとつとしていたから、名前は一致して当然である。

メロスとセリヌンティウス、あるいはダーモンとピンティアースという二人の友人の逸話は中世ヨーロッパでは知られたものだったのである。浦口の註釈書によればシェイクスピアの時代には流行のバラードになっていたらしい。シラーはゲーテに借りたヒュギーヌスの本をもとにバラード「保証 (Die Bürgschaft)」を執筆した。

シラー「保証」はメロスを主人公として「詩の女神の年鑑1799」に発表された後、1800年の「詩集」と1804年の「詩集」に収録された。その後出版社によって豪華版詩集が計画された時、シラーは「保証」も加筆改定して収録するつもりがあった。その際に表題が、„Die Bürgschaft“から„Damon und Pythias“に変更されたのである。この詩の前後には人名を冠したものが続くはずであったので、それに合わせて表題を人名に変更したと考えられる。それはキケロ (あるいはマクシムス) 流の名前であった。(出版の計画は1805年5月9日シラーの死をもって実現しないでおわった。) 人名にからむ表題以外の変更は一箇所だけである。詩の60行目、小栗訳「人質」では、「彼は焦燥にかられた (da treibet die Angst ihn)」と訳された部分が、「焦燥に彼は駆られた (Da treibt ihn die Angst)」となっただけである。文中の *treibet* (トライベットゥ) が *treibt* (トライプトゥ) になっているのは、口調の関係もしくは現代風の表記への訂正が理由であろう。

「走れメロス」はヒュギーヌスとキケロという「古伝説」及びシラーのバラード「保証」(小栗訳「人質」) で材料がそろったかのようなのである。そして「古伝説」については太宰治の小学校時代の教科書との関係が指摘されている。

（4）ダモン、ピチウスと「走れメロス」

「走れメロス」の素材となった「古伝説」は明治時代以来、日本においてはいわばおなじみの物語であった。小野正文は「太宰の場合、古伝説というのは、少年時代に高等小学国語読本で習った『眞の知己』に他ならない」（3, 423；「解題」）と指摘した。しかしここで言われている教科書「眞の知己」は「古伝説」のひとつにすぎないと考えられる。

太宰治は大正11年3月に金木第一尋常小学校を卒業し、同年4月に組合立明治高等小学校に入学した。高等小学校は2年制であるが、太宰は1年通っただけで、大正12年4月に青森中学に入学した。尋常小学校からすぐに中学に進学しなかったのは、「学力補充のため」（別巻、p.468：年譜）とされる。

小野が指摘したのは「高等小學讀本 卷一」（著作兼發行者文部省）の「第三課 眞の知己」である。その全文は以下になる。（旧字体を使用する。原文は縦書きで、人名と地名は傍線が添えられてあるが、ここでは省略する。）

第三課 眞の知己

一時の朋友を得ることは易く、眞の知己を得ることは難い。平素歡樂を共にする間は、肩を打ち、手を執つて、互に談笑するが、一旦利害相反すれば、忽ち仇敵となるやうな者は眞の知己ではない。眞の知己は死生の境に臨んでも、相信じて疑はないものでなければならぬ。

昔伊太利のシシリー島にピチウスといふ男があつた。或罪に依つて、國王の前に引出されて、死刑を言渡された。ピチウスは今生の思出に老父母の顔が見たくてたまらない。死刑執行の日には必ず歸つて来るから、此の世の名残に今一度父母に會はせてもらひたいと歎願に及んだ。王は一言の下にはねつけた。

ピチウスの無二の親友にダモンといふ若者があつた。王に向つて、

私はピチウスの親友で御座います。彼は決して二言致すやうな者では御座いません。どうか特別の御仁愛を以て、彼の願をお聞入れ下さるやう願ひます。其の代りに私を獄中に入れて、萬一期日に至つて彼が歸つて参りませんやうなことが御座いましたならば、私をお仕置下さいませ。

と言つた。王は此の友情に感じて、ピチウスの願意を聞届けて、ダモンを獄屋に入れた。光陰は矢の如く、約束の日限はせまつたが、ピチウスは歸らない。王は獄卒に命じて、厳しく獄門を固めて、ダモンの動靜に一層の注意を拂はせた。しかもダモンは平然として、少しも不安の色を示さない。彼は言つた。

若し期日に至つてピチウスが歸らないとしても、決して彼の本心から出たのではない。

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

何か不慮の故障が起つたのである。

いよいよ約束の期日になつた。約束の時間がせまつた。けれどもピチウスは歸らない。影も形も見えない。ダモンも今は是までと死ぬ覺悟を極めた。彼の親友に對する信用は更に變らない。彼は又言つた。

今こゝで殺されるのは最も信愛する友人の爲である。少しもうらむことはない。獄卒はダモンを刑場に引出した。彼の一命は寸刻の間にせまつた。此の時早く彼の時遅く、ピチウスは息も絶え絶えになつて、かけこんで來た。彼は途中風波の爲に妨げられたのであつた。若し期日に遅れるやうなことがあつては、一つには無二の親友を殺し、二つには二言を吐いた悪名を後の世に傳へると思へば、立つても居ても居られない氣がしたが、如何とも仕方がなかつた。船が陸に着くや否や、ひた走りに走つて刑場にかけて見れば、ダモンはまだ生きて居たので、餘りのうれしさに目前の死も何も忘れて、手の舞ひ足のふむ所を知らなかつた。

王は二人の信義と愛情に感激して、ピチウスの罪を許した。

若し我にもこんな親友を持つことが出来るなら、王者の富貴も榮華もいらぬ。
とは王の心の奥の奥から出た歎聲であつた。⁴⁰

「高等小學讀本 卷一」は大正元年10月30日に発行され以後版を重ねている。太宰が習つたとされる教科書の配列は「第一課 艦上の宮威仁親王殿下」、「第二課 足柄山」、「第三課 眞の知己」、「第四課 故郷」そして「第五課 布哇通信」である。それぞれの内容には触れないが、配列の妙というべきものがあり、今読んでも味わい深いものがある。(大正15年の改定版では「眞の知己」は第十三課である。)この教科書が依拠したものは何であつたのか。いうならば「古伝説」の典拠は何であるのか。教科書の主役の名前はキケロと同じダモンとピチウスである。しかし結末はキケロでも、ヒュギーヌスでもない。「こんな親友を持つことが出来るなら、王者の富貴も榮華もいらぬ。」という王の「歎聲」はヒュギーヌスにもキケロにもない。この出典は何か。

ダモンとピチウスの話は明治初期から以降、日本でもおなじみの話だつた。教科書関係にはよく登場しているし、シラーの詩も幾度か翻訳された。教科書「第三課 眞の知己」はその延長線上にある。管見によれば明治15年7月発行の修身教科書に取り上げられたのが日本における<ダモンとピチウス>の最初になる。太宰治「走れメロス」も明治15年以來の長い延長線上に位置しているのだ。

<ダモンとピチウス>の「古伝説」とシラー「保証」に関わる記事や翻訳は多い。以下は明治以降から「走れメロス」発表前後までの年代順の一覧である。「古伝説」については教科書関係を中心として、そして「保証」については翻訳の一覧である。管見に入った限りのも

のであることは言うまでもない。それぞれ必要に応じて全文あるいは内容を概説する。

1. 明治15年7月：「小学修身編 卷之二」（静岡県下伊豆国君沢郡大場村16番地大場学校）：
検閲人静岡県士族磯部物外（静岡鷹匠町寄留）、編集人静岡県平民篠山晃三郎（大場村82番地
寄留）、発行人静岡県平民小松啓吉（沼津上土町居住）

○古へ「シロキューズ」國王「デニース」、其學士「ダモン」ヲ、死刑ニ處セントセシ時、
「ダモン」ハ死ニ就クノ前、家族ニ別ヲ告ゲ、且ツ家事ヲ、處置スベキ為メ、期日ヲ定
メ、猶豫ヲ得テ、其家ニ至ランコトヲ乞ヘリ、其友ニ「ピチアス」ト云フ者アリシガ、
保人トナリテ、若シ「ダモン」ノ、獄ニ歸リ、來ラザルコトアラバ、自ラ代ッテ、刑ニ
就ベキコトヲ、獄吏ニ約セリ、然ルニ「ダモン」ハ、期日ニ至リ、果シテ其言ノ如ク、
獄ニ歸リ來リ、自ラ囚レニ就テ、従容死ニ處セラレンコトヲ乞ヘリ、國王「デニース」
此事ヲ聞キ、朋友交誼ノ厚キニ感ジ、「ダモン」ノ罪ヲ赦シテ、剩サへ、自ラ、兩士ト交
リヲ結バンコトヲ、求メシトソ、是朋友交誼ノ、互ヒニ厚キ規範ト為スニ足ルベシ⁴¹

2. 明治15年8月：「小學格言訓話 卷之二」：編集人静岡県士族鈴木忠篤（浜松居住）、出版
人静岡県平民齊藤源三郎（浜松居住）

「1」とほとんど同一。結末は「剩サへ自ラ兩士ト交リヲ結ハンコトヲ求メシト是レ即チ
朋友交誼ノ至厚ナルハ以テ人心ヲ感動スルニ足ルヲ証スヘク亦タ以テ後世友誼ノ規範トスル
ニ足ラン」⁴² 定価拾五銭のこの本は静岡県内を中心にして、東京や名古屋、群馬県、岐阜県の
書肆で発売されたことが本の末尾の広告から知られる。

3. 明治21年7月：「尋常小学修身口授教案 卷三」（石井音五郎、石井福太郎編）埼玉県浦
和町文華堂：「第六章 題目 友達との交りには真実を主とすべし、例話 ダモンとピチア
スの話 目的 友人との間は堅く約束を守り、真実を主として交るべしと諭す」

ダモンという学者と友達のピチアスの物語である。身代わりになるのはピチアス。国王は
人々の手本とするために二人を許すが、二人との交友を望んだという記述はない。この本は
大坂から北、函館まで販売された。東北では森岡、福島、山形、秋田の書店の名前が巻末広
告にある。山形は五十嵐太右衛門（現八文字屋書店）である。

4. 明治22年2月19日：「両羽之燈」第二号並号外：安達峰一郎「警世談林」：「第一篇 ダモ
ントピチヤストノ交リ」

5. 明治24年6月25日：「修身教育少年立志編」（大阪・明昇堂）：編纂者榎並則忠、発行者濱本

伊三郎

○「ダモン及ピチアス」の交誼を尽せし事

耶蘇紀元前四世紀の頃の事なりシラキースなる國あり其の国王をヂラニシウースと云ふ然るに當時有名なる哲学者にダモンなるものあり事を以て罪に触れたりヂオニシユース王怒りて之を捕へしめ將に之を死刑に所せんとすダモン其の死刑に陥るを豫知するや乃ち豫しめ家に帰り其の家事等を所置して然る後に刑に就かんことを請ふ、王之を疑ふや輒すく許さず時にダモンの友人にピチアスなるものありダモンの志を憐み己れ保証人となりて以てダモンの獄に帰り來らざるときは自ら代りて刑に就くを誓ひ以てダモンの請を允さんことを願ふ王即ち之を許す然り而して所刑の期日已に至るもダモン未だ獄に來らず王即ちピチアスを刑場に出し以て將に之を刑せんとせしに正に其の時を以てダモン馳せて獄に至りピチアスの刑せられんとするを見て曰く余こそ須らく刑に就くべしピチアス曰く否余が既に刑せらるべく決せり曰く余曰く否と大に之を争ふ王其の厚誼の厚きを感じ両士共に之を刑せずして放還し且つ之と交を結べりと云ふ⁴³

ここまでの例と比較して、筋立てに工夫が見られる。ピチアスの処刑寸前にやっとダモンが帰着する。全体をドラマチックにしようという意図が感じられる。濱本伊三郎は明治26年9月26日にも「初等教育修身口授用書」を発行している。ダモンとピチアスの話は明治24年6月25日発行の本と全く同じである。大阪市心齋橋筋の濱本明昇堂が売捌所である。

6. 明治24年10月10日：「新編小學修身事实全書 卷三」（大阪・盛文館）：「ピチアスの友誼遂にダモンの罪を救ふ」

学士ダモンとその友ピチアスの物語。「国王デニース此事を聞き朋友交誼の厚きを感じダモンの罪を赦し剩へ自ら両士と交りを結ばんことを求めしとぞ」⁴⁴が結末である。

7. 明治26年9月：「初等教育修身口授用書」（村上千秋編）（大阪・明昇堂；濱本伊三郎）：『「ダモン」及『ピチアス』の交誼を尽せし事』は「5」に全く同じ。

8. 明治34年7月：リギヨル（前田長太訳）「正義」

著者リギヨル（Francois Alfred Desire Ligneul；1847-1922）はハリスト教会の宣教師と思われる。明治期と大正期においておびただしい著書を残している。「正義」の一節が「古伝説」にかかわる。

○昔ダモンとピチアスは友誼洵に深く、相互の爲ならば死すとも悔みせずと誓ひたること前後百回もあり、然るに偶々シラクースの悪王デニスなる者ピチアスを死刑に處せり、ピ

チアスは家事を整理し來らんが爲に猶豫を請ひ、其友ダモンを人質に立て、若し定日に帰り來らずんば、ダモンは我に代りて死せんと云ふ條件を置けり、王及び他の人々も皆事の成行きを待望せしに、猶豫の期日迫まりたれども、ピチアスは帰り來らず、衆皆ダモンの無謀を見て、狂愚の所爲となしたれども、ダモンのみは其友の忠誠を寸毫も疑はざりしが、果して定日に帰り來りければ、王も之を見て大に其の信に感じ、啻に之を放免したる而已ならず、王自らも亦其友となり、三人相合して一人の如くならんことを乞へりと云ふ。⁴⁵

人質になるのがダモンで、ピチアスが漸く期日に間に合う。

9. 明治35年8月：三浦白水（吉兵衛）訳「西詩余韻」（発行者：仙台・佐藤養治）中のシルレル「愛と信（人質）」：「シュラキースの王ゼオニースに／ダモン七首をもて近けり」⁴⁶

10. 明治36年9月：マーデン（中村敬三訳）「品性之修養」（東京・大日本実業学会；成功叢書 第一編）：「第六章 大海の水に優る一滴の血」の中の「男子の一言は鐵の如し」

カルタゴの捕虜となったローマの勇士レギュラスが男子としての約束を守って再び捕虜になるために戻るといふ逸話が主である。それに続いて「履約の特性を有したる人の中に、最も有名なるはデーモン氏及びプシヤス氏なり。前者は其親友の身代りとなるべしとの、口頭の約を履行し、後者は其友人必ず期日に歸來して、処刑に服すべしと保證したるも、事故の爲め其友人帰り來らざりし時、従容として友人に代りて死刑に服せんとしたり。」⁴⁷

11. 明治39年1月：秋元蘆風（喜久雄）訳「シルレル詩集」（東京・東亜堂）に「保證（ダモンとピンティアス）」：「七首、衣服（ころも）に隠し持つて、／ダモン暴主に忍び寄りぬ。」⁴⁸

この本は大正2年11月には「増補改版シルレル詩集」（東亜堂）として出版される。

12. 明治41年7月：三土忠造「西史美談」（東京・三省堂）：「第十七 眞の知己」

ピチアスは「専横」のゾニシユス王を殺害せんとして、死刑を宣告される。しかし家の老父母に別れを告げたい。「ピチアスの無二の親友」ダモンが身代わりを名乗り出る。ピチアスはやっと期日に間に合うが、「風波のために支へられた」のであり、「船が陸に著くや否や、ひた走りに走って」刑場に飛び込んだのである。王は「二人の信義と愛情とに感激して、人間本来の善心に立帰って、ピチアスの刑を許した。若し、唯の一人でも、こんな親友を持つことが出来るならば、王者の富も位もいらぬ。とは、王の心の奥の奥から出た歎声であった。」⁴⁹

「高等小學読本 卷一」の「眞の知己」とほとんど同一文である。結末も同様である。

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

教科書の筆者が三土忠造であっても不思議はないくらいである。そしてこれは次の「13」にも通ずるものがある。

13. 明治42年8月：ボールドウキン（織戸正満訳）「新訳フェマス物語」（東京・日進堂）：
「第三十一章 ダモン—フキシアス」

若いフキシアスが暴君デオニシアスによって死刑を言い渡される。彼の故郷は都から遙か遠く、死ぬ前に父母や旧知に会いたい。この哀願に対して王は冷笑の上、怒鳴りつける。するとそばにいたダモンという青年が叩頭して、自分を身代わりにするように頼む。「私は彼の決して約束を破る様な男じゃない事を知つて居ります彼は必ず此處へ歸つて來ませう」⁵⁰ というのがダモンの言葉である。ダモンは「冷き鐵窓」につないでおかれる。期日がせまってもダモンは「敢て逃げ様ともしない、實にダモンは其友フキシアスの信實にして而も廉恥を重んずべきを尚信じて居るのであつた、彼の曰く『若しフキシアスが其日まで來ない様な事があれば、夫は決して彼の過失ではないので、側の者が彼を抱き止めて去らさないのに違ひないのだ』と」⁵¹ いう。ダモンが看守によって獄から出され、断頭台に行こうという刹那に、フキシアスが到着する。「實にフキシアスは途中暴風雨や難船に遭つたので斯くも歸るに暇がとれたのであつた。而して彼は一に定刻までに歸る事が出来なければかたがと謂ふ事を非常に憂慮して居つたので、」⁵² フキシアスはダモンに挨拶し、自ら手を後ろにして看守に身を委ね、間に合ったことを非常に楽しく思う。暴君も「斯くまで兩人が相愛し相信じて居るもの」⁵³ に対して苛刑を加える非を知って二人を許す。「尚『余は斯の如く相信じ、相疑はない朋友を得る事が出来れば余は余の富を換えても惜しくはない』と謂つたそうである、」

特に結末は「12」とよく一致している。

14. 明治42年10月：村上辰午郎「実践倫理講義（改定増補）」（東京・金刺芳流堂）

「第四 知人編」の「第二十二章 朋友の本務」にシラキユースのピシアスが暴君ダイオニヤス一世に叛し、死刑となる。親友ダモンが身代りとなる。暴君は友誼に感じて刑を免し、かつ二人の奉信するピサゴラス派の信徒となる。

15. 明治43年10月：ボールドウキン（近藤敏三郎訳）「新訳西洋五十名話」（東京・精華堂）：
「二十九、ダモンとフキシアス」

これは「12」「13」と内容は当然ながらほとんど一致している。訳者の近藤敏三郎は「品性修養の一端」⁵⁴ に貢献する意図をもって翻訳したが、著者については詳しくは不明である

という。著者 James Baldwin (1841-1925) には尚経歴は不明な所が残るが、アメリカの教育者にして編集者であり、多作な作家でもあった。その“Fifty Famous Stories” (1896) の訳書が本書である。古今の偉人英雄の逸話集とでもいうべき本であって、アメリカでは今でも読まれている。これは明治44年4月にも「歴史物語」(菅野徳助、奈倉次郎訳註；東京・三省堂)として発行された。“Damon and Pythias”は含まれていないが、“Fifty Famous Stories”から8編選択されている。青年英文学叢書の一つである。

16. 明治45年4月：後藤薫等「国定教科書に見えたる泰西教材の研究」(東京・明誠館)：「第二十九章 ダモンとピチユス (眞の知己)」

巻頭には勅語とその英訳が掲げられている。続く「凡例」には以下のようにある。「一、国定小学読本十六巻並に国定修身書四巻中に就き、泰西より来れる教材を蒐集し、一々その原文を掲げて之れが対訳を施し、以て国定教科書研究の資料たらしめんことを期せり。」「三、本書に蒐集せる寓話、逸話、伝記等は・・・総て国定読本に採用せられたる教訓美談のみなれば、青年の読み物として極めて穩健にして且つ有益なるのみならず、中学生其他一般の英語研究者の亦た之れによりて裨益する所鮮少にあらざるべしと信ず。」⁵⁵そしてその目次には「第二十九章 ダモンとピチユス (Dumond and Pitius)：高等小學読本卷一、第三課 眞ノ知己」とある。本文の英文は Baldwin “Damon and Pythias”そのままである。左頁が英文、右頁が日本語。最終ページの欄外には「一人の善良なる友は百人の親戚に勝る」というフランスの格言が掲げられている。

参考までに冒頭の部分と結末の部分の英語と日本語を掲げておく。⁵⁶

まず冒頭である。

XXIX. DAMON AND PYTHIAS.

1. A young man whose name was Pythias had done something which the tyrant Dionysius did not like. For this offence he was dragged to prison, and a day was set when he should be put to death.

「第二十九章 ダモンとピチユス (眞の知己)」

1. 昔以太利にピチユスと云ふ青年があつた。暴君デオニシアスの意に満たない事をしたので、王は非常に怒つた、其罪科に依て彼は捕へられて獄に下され遂に死刑に処せらるべき日さへ定められた、

結末は以下である。

7. The tyrant was not so bad but that he could see good in others. He felt that men who loved and trusted each other, as did Damon and Pythias ought not to suffer unjustly. And so he set them both free. “I would give all my wealth to have one such friend,”

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

he said.

7. デオニシアスは暴君ながら、さすがに他人の善行をも見分ける事が出来ないほどの極悪無道ではなかつたので、ダモンとピチユスとの如く斯くまで両友互に相愛し相信ずる者に対し、むげに苛刑を加ふるの甚だ道ならざるを覺つて、遂に兩人を赦して、尚「我若し斯の如き親友を得る事が出来るならば、我が富を盡くしても惜しくはない」と讚歎措く所を知らなかつた。

「高等小學讀本 卷一」の発行前に出された参考書である。そういうことも慣行としてあり得たのであろう。

17. 大正元年10月30日：「高等小學讀本 卷一」（著作兼發行者文部省）：「第三課 眞の知己」
この教科書は大正15年2月25日発行の版において大幅な改定がなされた。旧版の有栖川宮の項がなくなり、「第一課 昭憲皇太后御歌」である。そして「第十三課 眞の知己」である。太宰治が高等小学校1年生だった大正9年は初版のままである。

18. 大正元年10月：馬淵冷佑「高等小學讀本参考」（東京・弘学館書店）

「高等小學讀本」全体（巻一から巻四）の参考書である。「第三課 眞の知己」については以下のようにある。「(出典) 此の話はシルレルの詩集に精はしく見えて居る。ポルドキンのフィフティー フェマスストーリーズにも出て居る。次に其の全文を掲げよう。シルレルの詩は原文を其のままに訳さうとつとめたから、句調の悪い所もある。止むを得ない事である。」⁵⁷

馬淵訳のシラー「○ダモンとフィニチアス (Damon und Phinitias.)」の第1節は以下である。

(一)

おのれ暴君ディオニソス	刺さでは止まじ逃がさじと、
しのぶメロスの懷中に	明、皎たりや九寸五分、
されど、あはれや忽ちに、	捕吏の手に落ち、あへなくも、
高手籠手にしめられぬ。	「實吐け、汝は何故に
九寸五分をば持ちたるぞ。」	刺客は嚴たる口調もて、
これに答へて語るやう、	「虐主の手より我が里を
自由にせんが我が願ひ。」	「さらば汝は刑場に
悔いよ、汝の大罪を。」 ⁵⁸	

この翻訳は従来確認された明治期の三浦白水訳、秋元蘆風訳と昭和期の小栗孝則訳の間

に位置するものである。人名が表題はダモンであるのに、本文ではメロスとなっているのは、使用した原典が恐らく二種あったからと考えられる。メロスが主役となる初めての翻訳と思われる。

「○ダモンとフィシアス (Damon and Pythias.)」の結末は以下である。それが「16」に酷似していることがわかる。原典が同じであるからそれも当然である。

「王は暴君と呼ばれてゐるが、他人の善行を見分ける事の出来ない程の悪人ではなかつた。ダモンとフィシアスの様に互ひに相愛し相信じてゐる者に対して苛刑を加へるのは道でないと思つた。そこで、兩人を許してやつて、斯う言つた。『おれは斯んなよい友達を得ることが出来るなら、己れの富と取換へても惜しくない。』」⁵⁹

19. 大正9年11月：鈴木三重吉「デイモンとピシアス」（「赤い鳥」に童話として発表）

暴君ディオニシアスにかかわるふたつの話が語られている。第一話は床屋を警戒する話やドモクレスの剣の話などはキケロ「トゥスクルム荘対談集」そのままの観がある。第二話は「併し、ディオニシアスについて伝へられてゐるお話の中で、一ばん人を感動させるのは、怖らくピシアスとデイモンとのお話でせう。」⁶⁰という前置きで始まる。人質になるのはピシアスではなく、デイモンである。二人はピサゴラス派の学徒であり、ピシアスはシラキュースに来ていて、「それがいつもディオニシアスに反抗してゐるやうに睨まれて捕縛されました。」⁶¹という。結末は以下のようになる。

「ディオニシアスはすっかり愕いてしまひました。そして即座にピシアスの罪を許してやりました。こんな立派な人を殺すことは、いくらこの暴君にだつて出来る筈はありません。ディオニシアスは、それから改めて二人を自分のそばへよびました。彼は、これまで嘗て人を信ずることの出来なかつた、哀れな人間です。彼はしたいまゝの乱暴をしました。さうしておいて自分の命を少しでも長く盗むために、あらゆる人を疑りました。そのためには多くの人をどんどん殺したり押し込めたりしました。ですから彼はピシアスとデイモンとの二人のこの信実と友愛とを見ると、本当に何よりもうらやましくて堪りませんでした。彼は二人に向つてたのみました。『どうぞ、これから私もお前さんたち二人の仲間に入れておくれ。そして三人で本当の友達になりたい。』かう言つて、ピシアスとデイモンの手をとつたといふことです。」⁶²

ピサゴラス派のいうならば人格練磨や人間修養についての核心がずいぶんと丁寧に説明されている。それは「赤い鳥」の信条から発するのであろうが、関川夏央が「走れメロス」と比較して指摘するのは別の意味で「クライマックスがない。」⁶³ことはたしかである。

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

「赤い鳥」の大正11年3月号の童謡投稿者の中には2名の弘前の尋常小学校4年生もいる。4月号は八戸の尋常6年の女子の名も見える。余談かもしれないが、同じ年の6月には山形県南村山郡堀田第二尋常小学校4年金子てい（明治44年生まれ）の童謡「月の真夜中」が掲載されている。彼女は作家外村繁（明治35年－昭和36年）と結婚することになる。この小学校からはその後も金子ていを初め、多くの投稿が続く。

太宰治「走れメロス」を考える場合、鈴木三重吉の童話も考慮されなければなるまい。「デイモンとピシアス」掲載の「赤い鳥」が発行された大正9年、太宰治は金木第一尋常小学校5年生である。いずれかの時点で太宰が読んだ可能性も否定できない。

20. 昭和2年3月：「註釈シルレル詩選」（秋元蘆風選著：南江堂）

「Die Bürgschaft（保証）」について、材料はローマの著述家 Hyginus（ヒギーヌス）の寓話である。「二人の朋友はメーロスとゼリヌンティオスであるが、しかし他の著述家に従へば、ダーモーンとフィンティアス（Damon und Phintias）である。」⁶⁴として、Hyginus の話を概説している。

21. 昭和4年10月：James Baldwin 「Fifty Famous Stories（フィフティ・フェイマス・ストーリーズ）」（後藤一郎訳註；研究社英文訳註叢書）：DAMON AND PYTHIAS./デーイマンとピツィアス

中学2、3年程度の補助読と本学校以外の読み物として出版されたものである。左頁に英文、右頁に日本語文。「はしがき」によれば原著は「英米にて教養ある人士が好んで話す、つまり、書名が示すやうに famous なものばかりである。その起源の遠きもの、近きもの、歴史的なもの、教訓的なもの、悲壮なもの、滑稽なもの、等・等で、独り英文学に於いてのみならず諸外国に於いても、或は詩歌に作られ、或は文に引用された、又はされる種類のものである。そして各篇幼年者として学ぶ可き又記憶すべき何物かを必ず含んで居る。」物語の結末は以下のものである。暴君ダイオニシャスは「デーイマンとピツィアスが為したやうに、お互に愛し合ひ信じ合ふ人間は、理由なくして死刑を執行さるべきでないといふことを感じた。それで両任を放免した。『予は一人でも斯んな友人を持つたならば予の富を悉く差出してもよい』と彼が云つた。」⁶⁵

山形大学図書館には昭和6年2月発行第5版が存する。山形師範学校が昭和8年に購入したものである。わずかな期間で5版とは、この本がいかに読まれたものであるかということを示している。

また“Damon and Pythias”を収録しないで出版された“Fifty Famous Stories”もある。明治45

年5月発行の「歴史物語」（菅野徳助・奈倉次郎訳注；東京・三省堂；青年英文叢書）や大正3年の「フィフティ・フェイマス・ストーリーズ」（紀太藤一訳註；東京・武田芳進堂；英学生文庫 第三編）である。Baldwinの本が英語学習の参考書としてひろく使用されたことが知られる。

22. 昭和12年7月20日：「新編シラー詩抄」（小栗孝則訳；改造社）：「人質 譚詩」：「暴君ディオニスのところに／メロスは短剣をふところにして忍びよつた」⁶⁶

太宰治に直接に参考にしたとされる本である。

23. 昭和15年5月1日：太宰治「走れメロス」発表（「新潮」5月号）

24. 昭和15年6月15日：「女の決闘」（河出書房）に「走れメロス」所収。

25. 昭和16年2月23日：新関良三編「シラー選集（一）」（富山房）：「擔保」（木村謹治訳）：「解説」は全体の簡潔さを指摘し、「この簡潔は二人の男の友情を徹頭徹尾内的な純粹誠意あるものとして表現すべき効果百パーセントの手段として役立つてゐる、と言ふべきであらう。」⁶⁷と述べている。

以上が管見に入った「走れメロス」発表時期ころまでの「古伝説」と「シルレルの詩」にかかわる歴史である。あまりに古いものはともかくとして、また「走れメロス」発表以後のものは別として、他のいずれであっても太宰の記憶にあったとか、あるいは目にとまり、創作の直接的な動機となった可能性がある。「シルレルの詩」については三浦白水、秋元蘆風そして小栗孝則のほかに「18」馬淵冷佑があらたに確認された。また「古伝説」に関して新しい可能性が確認される。ヒュギーヌスだけではなく、キケロも考慮されなければならない。たとえヒュギーヌスひとりに限定しても、それが上記のリストのどれに関連するかは不明である。筆者には「19」鈴木三重吉と「21」James Baldwin「Fifty Famous Stories（フィフティ・フェイマス・ストーリーズ）」が「古伝説」として有力であるように思われる。「シルレルの詩」については小栗孝則が有力ではあるが、しかし「18」（馬淵）や「20」（秋元）なども視野に入れて再考する必要があるだろう。ここで取り上げたものの他にも翻訳が存在する可能性も否定できない。それは「18」の〈発見〉が示す通りである。弘前高等学校時代におけるドイツ語学習との接点もあり得るかもしれない。

また「高等小學読本 巻一」の「眞の知己」にかかわっては以下のような事実も指摘できる。「眞の知己」はJames Baldwinの“Fifty Famous Stories”に収められている“Damon and Pythias”が元になっている。ところがそれ以前の教科書はヒュギーヌスもしくはキケロを元にしてい

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

たとえられる。結末が違うのである。Baldwinは「13」が示すように親友を得ることができるならば「富」と交換しても惜しくはないとなっている。「富」との交換が言われるのはBaldwin系統だけと言ってよく、それ以外はたとえば「1」が示すように「富」という言葉は用いられない。王が三人目の朋友となることを求めるのである。教科書作成の歴史において大正元年の「高等小學校読本 卷一」「眞の知己」はそれ以前の教科書が典拠していたヒュギーヌス、キケロからBaldwin “Fifty Famous Stories”への乗り換えがなされたように思われる。そして太宰治「走れメロス」の結末は「眞の知己」ではない。「眞の知己」は「走れメロス」を考える場合、「古伝説」のひとつにすぎないと考える理由である。

(5) 「走れメロス」、もうひとつの可能性

「走れメロス」は「太宰『中期』の重要な方向である、まさに気恥ずかしくなるようなく美談」の典型⁶⁸とされる。＜美談＞の本質を考えるためにはシラー文学が問題となる。

シラーは「詩人としてはドイツの理想主義を代表する闘士」⁶⁹であった。成績優れた少年シラーはラテン語学校から創設されたばかりの軍人・官吏養成のカール学院に転校させられる。「高名な暴君オイゲン公が自ら校長をしていた、一片の自由もない、軍隊的なこの学院ですごした8年間が、かえって自由を求める不屈の闘志をうえつけずにはいなかった。」⁷⁰ 処女作「群盗 (Die Räuber)」（1780）が1781年にマンハイムで初演された時の反響はものすごく、それは「圧制と因習への反逆、溢れるばかりの激情、主観に走りすぎた理想の描写」⁷¹の劇とされる。匿名で自費出版されたこの本の表紙には小さいながら「暴君に抗して」と印刷されていた。シラーは『『群盗』以来、・・・自由と革命を叫んだ』⁷² 詩人としてあった。現代においてもシラーと言えただちに「自由の作家！」⁷³というイメージである。シラーは社会政治的に読まれる要素が大きかったのである。

シラー最後の劇「ウイリアム・テル (Wilhelm Tell)」（1804）もまた悪代官に体现される圧政に対するテルの抵抗がテーマとなっている。これをもとに山田郁治は明治15年10月に「哲爾自由譚 前編」を発行する。当時一般的だった稗史小説の勤善懲悪を装っている。しかしその主題は「哲爾自由譚一名自由之魁」という副題が明らかにしている。主題は「能ク味ヒナバ。自然ト悟解ル由アラン」⁷⁴というのだ。自由民権運動や国会開設運動などが盛んであった当時の社会に対してシラーは強く訴えるものを有していたのである。

明治36年の本「新時代の道徳」（正岡芸陽）にも「余は余が精神の自由なる限りは、如何なる束縛にも服従せざるべき也」⁷⁵という精神から「盗賊」や「ウキルヘルム、テル」が生まれたとある。日本でも1905年（明治38年）にシラー生誕百年祭が盛大になされたことが示すように、シラーの名は明治初期からよく知られていた。シラーの自由を求める精神が共感を呼

んだのである。そのためであろう、偉人伝などではシラーが幼少の頃、木に登って雷の観測をしたという逸話まで紹介されている。シラーは日本においてそれほどに関心を呼ぶ存在であったことになる。

太宰治がシラーのバラード「保証」（小栗訳「人質 譚詩」）に「依拠」（近藤）して「走れメロス」を構想したとするならば、このようなシラーの本質を捉えなかったことがあるとは思われない。いわゆる熱海事件にこの作品をからめて考えることは一種冒涇であるようにさえ思われる。堤重久の証言によれば太宰にとってシラーと言えば「群盗」であった。「おのれもまた、群盗の一員であるとの自覚が深かったようです。」⁷⁶と言う。

たとえば藤沢周平の言に「小説というものは、元来軟弱を善しとするものである。むしろそこに強い主張があって、弱いものこそ本当は強いのだと言ったりする。」⁷⁷この言葉は太宰治にもあてはまるであろう。「軟弱」の究極の体現のような熱海事件ではなく、作家としての信念から発した作品が「走れメロス」であるように思われる。「天才太宰治も、郷里のまじめな生活者からみれば、放蕩に身を持ち崩したあげく窮死した一箇の道楽息子にすぎないわけである。」⁷⁸とする杉森久英に対して、長兄である参議院議員津島文治が身びいきをあえて避けるが如く、「あれは一箇の不良少年です」⁷⁹と言うのももっともなことである。しかし太宰は軟弱ではなかった。浦和高等学校生徒の野原一夫が小説の原稿を見せた時のことである。『小説を書くというのは、日本橋のまんなかで、素っ裸で仰向けに寝るようなものなんだ。』だしぬけに、ごくさりげない口調で太宰さんはそう言った。⁸⁰昭和16年秋のことである。昭和11年11月発表の「喝采」にも同じ告白がある。それは本当は強くなければなされ得ない覚悟ではないだろうか。

小栗孝則の言う「詩人の気魄の旺盛さや、自我の発展、あるひは詩人の創作力を刺激してゐる現実と理想の葛藤の表現の鮮烈さ、ことに奔放な意志による理想の建設の中に、其の高調する自我の全影を映し出そうとする詩人の努力」⁸¹は太宰に通じたはずである。この延長線上において「走れメロス」は捉えられるべきではないだろうか。＜信義＞とかあるいは＜友誼＞のような道義的な側面、いうならば＜美談＞の側面からだけ捉えられるべきものではない。シラーがゲーテ宛に出した手紙の文言に従うならば、歴史知識の羅列ではないところの「出来事を解明する」という意図である。このように考えるならば、「走れメロス」に登場する「一隊の山賊」（3, 172）に対するメロスの「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしてゐたのだな。」という言葉が含む意味が明らかになる。「山賊が金銭ではなく命を望むのも不可解であり、難問というより他ない。」⁸²という「難問」を解くものになるのだ。王の専制ぶりの強調とそれに対する抵抗である。そしてヒュギーヌスであれ、シラーであれ、冒頭で言われることはまさに王の暴政に対する抵抗なのである。このことは忘れられがちなことである。結末の、従って全体の＜美談＞にとらわれすぎた結果である。

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

アイルランドの詩人にして劇作家バニム (John Banim, 1798-1842) に5幕悲劇“Damon and Pythias”がある。バニムの悲劇と太宰治「走れメロス」の関連について考えてみたい。

バニムの悲劇は1821年ロンドン Covent Garden で上演され、評判を呼び、バニムの代表作となる。この悲劇はアメリカ合衆国の青年ラズボーン (Justus H. Rathbone; 1839-1889) に大きな感銘を与えた。ラズボーンはかねて南北戦争 (1861年4月-1865年4月) 下の対立と不信の世相を憂え友愛 (brotherly spirit) をモットーとする団体 (order) の創設を意図していた。名前に「騎士」を冠することも決定していた。ラズボーンは1864年2月バニムの悲劇“Damon and Pythias”を知って感激し、自分の団体をピシアス騎士団 (Knights of Pythias) と命名することにした。Damon と Pythias の友情・信頼に感激したのである。騎士団のモットーは“Friendship, Charity and Benevolence” (FCB) である。騎士団創設に作用したのは現代にも続くアメリカ社会特有の理想追求の清教徒的な精神であろう。＜不正＞は正して＜正義＞を追求するという精神である。司馬遼太郎がいうところの「無意味なほどに“正義”で昂揚する社会」⁸³である。「無意味」はともかく「昂揚」した「正義」が南北戦争に際して一方の側において働いたことは確かである。オルコット (Luisa May Alcott; 1832-1888) 「若草物語 (Little Women)」にはその後日譚めいた「愛の学園 (小さき人々) (Little Men)」(1871) がある。その「第14章“Damon and Pythias”は「バーエル先生は絶えずその小デーモンと小ピシアスの物語を話して倦まなかつたのである。」⁸⁴という文で終る。オルコットもまた1862年に看護婦として志願したのであった。

バニムの悲劇の主人公である Damon には Lucullus という家僕がいる。この家僕はカルタゴの海賊によって故国イタリアで捉えられ、奴隷として売り飛ばされてきたのである。Damon は彼を解放する。以来 Lucullus は Damon の忠実すぎるほどの家僕になった。このような状況設定はピシアス騎士団創設の時代、すなわち南北戦争のアメリカの現状を反映しているように感じられたはずである。

そのあらすじは次のようになる。⁸⁵

シラクサ (Syracuse) の町では上院議会が開催され、Dionysius の一党が実権を掌握する。腹心の Philistius が議長に選ばれたのである。前途洋洋のはずではあるが、しかし Dionysius にとって Damon を筆頭とするピタゴラス派の6人の反対派議員が目障りである。Dionysius は元来よそ者であるが、戦争によって軍事上その他の原因で窮乏する町の民衆を扇動して大きな勢力となっているのである。彼は町の城塞を占領する。「兵士並びに戦う男は有害な議論の男をものともしないことを見せてくれよう。」(第1幕第1場) 城塞は占領され、武器と財宝は Dionysius の手に落ちる。＜Dionysius 万歳＞という歓声の中、Damon は Dionysius 配下によって Dionysius を暴君 (tyrant) と呼んだという理由で逮捕されそうになる。火刑にするというのだ。その時「親友」(第1幕第1場) の Pythias が登場し、Damon を救う。カルタゴ戦

の勇者 Pythias は、翌日に結婚式をあげるために休暇をもらって帰国したのである。婚約者 Calanthe は希望と夢にあふれている。憂国の士である Damon はしかし、親友を政治に関わらせたくないと思う。また家僕 Lucullus に対しては自分の妻 Hermion と息子を町から近いエトナ山の山腹にある別荘に連れて行くように命じる。すでに何事かを決意したのである。（以上第一幕）

Dionysius は王冠を授与されたという噂が広まり、町の通りは兵隊で埋まっている。議会は臆病である。Pythias によれば Damon は「なにか国家の最も緊急な事態にこころを動かされている。」（第2幕第1場）Damon は親友に短剣を借りて上院に行こうとする。Pythias はいっしょに行こうとする。それを婚約者は必死で制止する。Damon も拒否する。議会の建物に戦争の免をしめて行くことは「法に反する」（第2幕第1場）からである。Pythias は性急な事はしないようにと言って、花嫁とともに去る。Damon も「闇雲に馬鹿なことはしないよ。」と約束をする。その後 Damon は議事堂に入ることを武器を手にした兵士によって阻止されそうになる。彼は議事堂において自由に公道を歩き、自由に議論し行動する「ノーブルな権利」（第2幕第2場）が奪われたことに抗議する。しかし逆に「扇動者」呼ばわりされてしまう。＜町が苦境にある今、議論好きの議会など必要はない、議会を解散して Dionysius を国王にしよう＞という提案は可決される。反対を表明したのは Damon と5人の議員だけである。議長 Philistius によって議会は解散され、＜Dionysius 万歳、シラクサの王様万歳＞の声があがり、6名以外の議員は全員 Dionysius の前に膝まづく。

Dionysius は Damon と仲間を町の平和を乱す騒乱好きときめつけ、「謀反人 (traitor)」（第2幕第2場）は議事堂から出て行けとののしる。さらに Dionysius は親衛隊を呼びつけて、Damon の逮捕を命令する。すると Damon は「さあ、自由な男の恨みを受けよ。(First, receive a freeman's legacy)」（第2幕第2場）と叫んで Dionysius に飛びかかり、短剣でもって刺そうとする。しかし Damon は失敗して捕らえられ、Dionysius 王によって公開処刑の刑を宣告される。一方花嫁の家にいる Pythias は町から聞こえてくる歓声に驚く。Damon のことが心配なのだ。彼は冷静で理性的なピタゴラス派であるが、生来の「ひどく熱血的」（第2幕第3場）な言動を押さえることが難しい。心配の最中に Damon の伝言が届く。来てほしいという伝言である。Pythias は泣いて制止する Calanthe を振り切って Damon のところに急ぐ。

城塞の牢に閉じ込められている Damon は「生！それは何だ？無の名前だ！」（第2幕第4場）と自問する。ピタゴラス派学徒の面影かもしれない。死ぬ前に妻に会いたいという Damon の願いは Dionysius によって即座に拒絶されたという知らせがくる。（以上第2幕）

処刑台に連れていかれる Damon のところに Pythias が駆けつけてくる。「第一の親友 (his nearest friend)」（第3幕第1場）である自分に友の最後の言葉を聞かせろというのである。Damon は Pythias に対して妻と会うための6時間の猶予どころか、1時間の猶予も許されなかったこ

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

とを教える。しかし親友と会うことができたので、妻子の将来についての心配も半分消え、Pythias が Calanthe と結婚してしあわせになることができればよいのだと言う。Dionysius 王がやって来ると、Pythias はその前に膝まづいて Damon に時間の猶予を与えて釈放し、妻子と会うことができるようにすることを懇願し、Damon の代わりに自分を牢につなぐようにと申し出る。「彼の帰還の人質として (as pledge for his return)」(第3幕第1場)である。Dionysius の二人は兄弟であるのかという問いに対する Pythias の答えは「こころの兄弟 (brother in the heart)」だというものである。Dionysius は Damon の帰還を信じることはできないが、Damon の鎖を解き、Pythias を人質として鎖につなぐ。Damon の別荘までの距離は4リーグ (league) という。(1リーグは約3マイル。1マイル=1,609メートル) 王によって6時間の期限を与えられた二人は涙ながらに別れを告げあう。Damon は「友情という神聖な義務 (the sanctity of friendship)」(第3幕第2場)のために必ず戻る決心をして買い入れたばかりの馬に乗って出発する。

ところが国王 Dionysius は変装して自ら Calanthe の家に行き、国王が Damon のシラクサ帰還は阻止することを決定したという情報を教える。Calanthe は国王その人の言葉とはわからない。身代わりとなった夫の命を助けたいという Calanthe に対し、王は夫と彼女をシラクサから逃がしてやるともちかける。王は地下の牢の Pythias のところに下り、逃がしてやるから急いでついて来いとせかす。自分は暴君の家のものである。王は Damon の帰還阻止を阻止し、Pythias を代わりに死なせるために12名ばかりの男を派遣したことを偶然に知った。そこで救出に来たと言うのだ。獄吏は買収したと言う。しかし Pythias は Calanthe の懇願にもかかわらず、「名誉 (honor)」(第3幕第3場)を重んじて脱出は拒否する。国王 Dionysius が脱走を持ちかけるのは、Damon の帰還を信じているからであるし、また Damon に強力な政敵を見ているからでもある。(以上第3幕)

第4幕、舞台は一転して Damon の別荘の庭になる。妻 Hermion が子供といるところに Damon が現れる。事情を知った妻は夫に対し行かないでと絶叫する。自分を殺すか、あるいは家族のためにいっしょに逃げてほしいと言うのである。しかし Damon は「不名誉 (dishonor)」(第4幕第2場)を回避するために戻ろうとする。太陽も西に傾いてきたのであるから、風よりも早く急がねばならない。ところが乗ってきた馬を家僕の Lucullus が殺してしまったことが判明する。主人を思って帰還をさせないための行動である。Damon は怒って Lucullus を海中に投げ込もうとする。Damon には Pythias の悲痛な叫びが聞こえたのである。「Pythias が殺されてしまう。彼の血はわが魂だ。／彼は叫ぶ、Damon、君はどこだ、君はどこだ、と。」(第4幕第2場)このシーンは舞台の見せ場である。(以上第4幕)

第5幕はシラクサの町の広場をもって始まる。処刑台が置かれてある。舞台の奥には牢獄の門が見え、斧を手にした執行人の姿もある。大勢の見物人が集まっている。Damon が帰還

するとは考えられないし、Dionysius の怒りは大きく、赦免の見込みもない。Pythias の婚約者 Calanthe も現場に立ち会うために来ている。（今日が結婚式の日である。）そして日没まであと6分となる。Pythias は牢から処刑台の方へと進む。陽は傾き、Pythias の心には友に対する疑念が一瞬生じる。「いや、いや、こう考えるだけで、Damon、君を裏切ることになる。疑うなど恥ずかしいことだ。(No! No! I wrong thee, Damon, by that half thought- / Shame on the foul suspicion!)」(第5幕第1場) Pythias は「天がなにか彼の邪魔をして戻らせないのだ。」と考えて、友を信頼する気持ちを取り戻す。Damon には妻も子もいる。自分が死ぬほうがよいと思う。

あと残り2分となる。Pythias は Calanthe と抱き合い、最後の別れをする。「触ればこんなに暖かいのに、／何という冷たい移動になるのであろうか。溢れる生命も美も／深い墓のじっとり湿った土の中へとは。」(第5幕第1場) などはあたかもハムレットの台詞のようである。Pythias は「信頼していた Damon の裏切り (treachery)」(第5幕第1場) を疑う。しかしすぐに思いなおし、Damon を責めないようにと Calanthe に言う。

処刑まであと1分となる。Calanthe には彼方の夕闇の中、何かがかすかに見える。しかし彼女は無理やり Pythias から引き離されて気を失い、舞台から運び出される。いよいよ処刑である。その時遠くから歓声が聞こえてくる。Pythias が処刑台の上に飛び乗ると、遠くの丘の上に馬に乗って全速力で駆けて来る人間の姿が見える。Pythias は Damon でないことを祈る。友には妻も子もいるのだ。そこに大歓声と太鼓の音とともに Damon が飛び込んでくる。Damon は Pythias の無事を喜んで倒れる。大汗をかいており、顔は血みどろでもある。Pythias は一度でも友を疑ってしまったことを恥じる。「彼のためなら死ぬこともできた。／それなのに疑ってしまった。」(第5幕第1場) Damon は Pythias と抱き合う。二人とも非常に喜びようである。Damon は Pythias に対して私を疑ったとしても、それは許すと言う。遅れそうになったのは家僕によって馬を殺されたからである。間に合わないという絶望の瀬戸際で、馬で行く旅人を発見し、馬を奪ったという。Damon が処刑台に飛び上がると、周囲から歓声が繰り返しわき上がる。Damon は国王 Dionysius がいたらあざ笑ってやるのと言う。すると Dionysius が姿を見せ、それまでの変装を脱ぎ捨てる。Dionysius は Damon に生命と自由を与えることを宣言する。Damon は処刑台を飛び降りて Pythias の腕の中に飛び込む。Pythias も Damon も王の言葉に感激し、感謝する。そこに Pythias の婚約者 Calanthe や Damon の妻 Hermion や子供も駆けつけ、喜びあう。Dionysius は Damon と Pythias に対して改まって「君達は私にお返しをしてくれた。今や私は今まで知ることもなかったよろこびを味わい始めた」と告白する。そして一緒に美德の道を歩みたいと言う。(以上第5幕)

ニューヨークで発行された1860年版では Damon が Pythias の腕の中に飛び込むところで終わる。1821年のロンドン版は悲喜劇的なハッピーエンドと言えるが、ニューヨーク版は Dionysius

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

王の悪辣ぶりが際立つことになる。それは朋友信頼の言動という理想と、それと対極にある不正義をあぶりだすものになっている。

バニムの劇は紀元前のシラクサが舞台であるから、*gods* という言葉が頻出する。*gods* であるが、しかしその言葉はまるでキリスト教の *god* のように聞こえる。バニムの“*Damon and Pythias*”はお涙頂戴のメロドラマにすぎないように見えて、宗教的・キリスト教的な匂いが強い。一例を挙げるならば *Damon* は死んでも「至福千年」（第3幕第1場）に入ることができるならば事態はあきらめるつもりになる。しかし死ぬ前に家族に一目会いたいと思う。キリスト教的な精神であると同時に人間的な心情でもある。友に対する信頼や犠牲の精神、全体にあふれる公正と正義の精神など、ラズボーンが騎士団に *Pythias* という名前をつけたのも納得できる。*Dionysius* 王は人数を送って *Damon* の帰還を妨害し、*Pythias* を身代わりに死なせるつもりと言う。〈身代わりに死なせる〉は“ransom”という言葉で表現されている。日常的には〈賠償する〉、〈身請けする〉そして〈賠償金を取って解放する〉を意味するが、神学的には「(キリストが十字架によって) 贖罪する、(罪を) あがなう」(研究社：新英和大辞典)を意味している。このキリスト教の精神そのもののような表現もラズボーンに強く訴えたに違いない。劇の全体が波乱に富んでいて、舞台効果のほどは容易に想像できる。*Damon* が馬で駆け込んで来る最終場面などは、まるで本物の馬が舞台上に勢いよく飛び込んでくるかのような印象を与えられる。また家僕 *Lucullus* の行動や、*Pythias* の婚約者 *Calanthe* と *Damon* の妻 *Hermion* の夫を死なせたくないという思いから出る言動など、観客を笑わせると同時にまたしんみりさせる要素も欠けていない。*Damon* の子供が *Pythias* みたいな人になりたいと言う場面はまことに健気であり、特にアメリカでは感動を与えたと思われる。

1821年版あるいは1860年版のバニムの“*Damon and Pythias*”と太宰治「走れメロス」に接点は存在するだろうか。ヒュギーヌスを初めとする「古伝説」と「人質」（小栗孝則訳）を主とするシラーのパラード「保証」のいくつかの翻訳群そして「高等小學読本 卷一」の「眞の知己」及びボールドウィンなどには存在せず、バニムと「走れメロス」には共通して存在する要素に注目したい。

バニムの悲劇では国王 *Dionysius* が *Damon* の帰還阻止のために一団の男を差し向けたことが語られる。*Damon* が実際にそういう一団によって妨害されたかどうかは不明であるが、これは「走れメロス」の山賊の一団にあたる。メロスが即座にそれを王の差金であろうと判断することや、山賊が金銭ではなくメロスの命がほしいというのはバニムの影響ではないか。これは「山賊が金銭ではなく命を望むのも不可解であり、難問というより他ない。」という疑問に対する解答になるように思われる。バニムの劇では *Pythias* は結婚のために休暇を得て戦地から帰国する。*Damon* との再会は久しぶりと考えられる。「走れメロス」におけるメロスとセ

リヌンティウスは2年ぶりで再会する。久しぶりである。バニムにおいて Damon は妻子を別荘に移す。別荘にいっしょに行くことができない理由は「仕事からそれはできない」「国務が私を離さない」（第一幕第一場）である。一方「走れメロス」においてメロスは妹を結婚させたならすぐに、「市に用事を残して来た」（3, 168）のでシラクサに帰らなければならない。二人の使命は同じである。そしてバニムの劇では Pythias の胸中に一時的ではあるが、遅れる Damon に対して疑念がわく。「走れメロス」ではセリヌンティウスも「私はこの三日の間、たつた一度だけ、ちらと君を疑った。」（3, 177）のである。バニムの Damon は身代わりとなっている Pythias が自分を疑って当然という気持ちがあって、「私を疑ったか。認めたとしても許すよ。」（第5幕第1場）と言う。Damon は「走れメロス」のメロスのように遅れても仕方ないという「悪い夢」（3, 175）は見ない。しかし親友同士が思うところを打ち明けあい、それによって和解と信頼がいつそうゆるぎないものになるという点では共通と言える。またバニムの Damon はたしかに「悪い夢」は見ないが、しかし結末近く「夢みたいな恐ろしい混乱」（第5幕第1場）の気持ちに襲われる。

バニムにおいて人質となっている Pythias は太陽が沈むからと処刑台へ行くことをせかされ、その婚約者 Calanthe には夕闇の故に遠くに目を向けるがよく見えない。はるかかなたに馬上の Damon が見えるはずなのに。「走れメロス」においてもメロスは「ゆらゆらと地平線に没」（3, 176）する太陽と競争である。バニムの Damon は馬に乗って処刑場に駆け込む。彼は大汗をかいており、顔はどす黒く、大きな身体は疲労からひどくぐらぐらしている。十九世紀初期の劇でなければ、上半身は裸となったかもしれない。「走れメロス」の「メロス、君は、まつばだかぢやないか。」（3, 178）というのはこの部分の読み替えかも知れない。⁸⁶あるいは王が変装をく脱ぎ捨てる *throw off*> という動作がこの連想を呼んだのかも知れない。（ちなみに「緋」のマントはく勇者>を象徴するものと考えられる。）

バニムの“Damon and Pythias”は「走れメロス」とはこのように重要な箇所がいくつも共通する。それはヒュギーヌス、キケロの「古伝説」やシラー「人質」（小栗訳）などにはないものである。「高等小學読本」と Baldwin にもない。これらの要素が太宰治の全くの創造という可能性も排除はできないが、しかし共通要素はあまりにも多い。しかしバニムはイギリス本国では忘れられたような作家である。日本で知る人は多くあるまい。そのような作家と太宰とのつながりを求めることに可能性は存在するのか。

日本では明治時代初期にすでにバニム“Damon and Pythias”が知られていた可能性があるのだ。拙論（4）のリスト「4」安達峰一郎がその例である。⁸⁷安達は明治2年山形県東村山郡山辺町（山形市の隣町）に生まれ、外交官として活躍した後、昭和6年にオランダにあった常設国際司法裁判所の所長に日本人として初めて選ばれた人物である。高潔な人格で知られ、昭和9年（1934）になくなったときには、オランダの国葬になった。（現在の所長は日本人と

しては二人目の小和田恒氏である。) 祖父のおかげで漢学の素養が深かった峰一郎は明治17年上京し、司法省学校に入学。明治22年7月には帝国大学法学部に進学し、明治25年7月の卒業と同時に外交官試補に採用され、日露講和会議では小村寿太郎全権を助ける。安達峰一郎が東京で勉学中であった明治22年2月に発表した警世の文章にバニムの劇の影響が見られることに注目したい。それが「4」「両羽之燈」に掲載された文章である。

「両羽之燈」の「第二号並号外」は奥付によれば山形県羽前之国南村山郡山形横町の両羽社が発行所であり、発行人は菊地豹太郎、編集人は渡邊千次郎である。第二号は明治22年2月19日発行で、冒頭の記事は帝国憲法発布式を祝うという体裁である。(発布式は2月11日であった。) 号外の発効日は2月25日であるが、読者には合本で送られている。

冒頭の「時事」記事は県会議長が批判と揶揄の対象である。憲法発布式に招待されて得意満面の言動が批判され、平民主義を標榜しながら藩閥的な高官のおだてにのっているとして揶揄される。この件からだけでも「両羽之燈」の立場は鮮明であり、安達峰一郎の論文「警世談林」の主張もまた同様である。「金モールノ光輝粲然トシテ目ヲ眩セザルニ非ラズ、其胸中一点国ニ竭スノ至誠ナキヲ奈何セン」⁸⁸ という文で始まり、肩を打って談笑はするが、その心情は紙のように薄い。「殊ニ高尚ナル理想ト堅固ナル道義心トコソハ斯民ヲ率ヒテ宇内ノ優者タラシムル最強原動力タルナレ」という信念から筆者の安達は「警世談林」10篇を発表するものであるという。そして「第一篇 ダモントピチヤストノ交リ」となる。

シラキューズの残忍な君主を除こうとする「隠謀」が露見し、主だった者に死刑が宣告される。ダモン (Damon) もそのひとりで、処刑の前に故里で血縁者に別れを告げたい。王はダモンの朋友のなかで身代わりとなる者がおれば許すという。王はそのような人がいるとは思わないのである。ところがダモンには親友が3人いて、其の中のひとりピチヤス (Pithias) がただちに身代わりを願い出る。王は驚くが、一旦約束したことであるので、聞き入れる。

しかし三日の期限が迫ってもダモンは帰還しない。ピチヤスは海上風雨がダモンの遅延の理由であると考え、ダモンに対する信頼はゆるがない。また自分には妻子もいないからかえって好都合と喜ぶ。そうして死刑の日となる。ピチヤスは処刑台の上で、ダモンは誠実な君子であり、間に合うために十分に努力したはずであると思う。ダモン信頼の気持ちは揺るがない。そしてまさに処刑という瞬間に一人の騎馬武者が馳せてくる。馬は汗をかき、白泡をふいている。騎馬武者はダモンである。ダモンは馬から下り、友人を抱きしめて海上の暴風が原因で遅れそうになったと絶叫する。しかしピチヤスは喜ばない。友が死ぬことになるからである。その様子を見た王はこころを動かされ、二人を許し、「二人ニ向ヒテ懇コロニ基交ヲ求メケリトゾ」ここまでが本文である。

安達にはバニムの影響が見られる。バニムとは違ってダモンの帰還の期限は三日間であるが、共通する点がいくつもある。なによりも馬の使用が共通する。馬はバニムの劇にしか登

場しない。安達は学生時代に英語教科書としてバニムを読んだかも知れないし、独習教材だった可能性も考えられる。またピシアス騎士団の介在もあったかも知れない。この点に関しては澤田氏の研究を待ちたい。そして太宰治がバニムの原書を読んだという可能性も全くは否定できない。「走れメロス」の新しい典拠の提出である。定説のヒュギーヌスという「古伝説」とシラーの「人質」等に更にバニムの劇が加わることになる。明治22年頃と昭和15年頃では時代間隔が大きすぎるかも知れない。しかしよい教科書・参考書の息は長いものである。Baldwinがそのよい例となる。バニムの劇と太宰治の間には何らかの形で接点があったと考えられるのである。

安達は二人の朋友こそ「真正ノ友誼」であるとし、「世間無数ノ輕薄兒ヨ、縦令ヒダモンピチヤスノ交誼ニ倣フコト能ハズトモ、セメテハ誠ノ道ヲ以テ人ニ接セヨ、蓋シコノ道ヲ除キテハ天下他ニ真正ノ康福ヲ與フルモノアラズカシ」とうたえる。安達峰一郎がこめた政治的な意味は誤解から遠い。ダモンとピチアスの逸話には政治的な意味を含めることができたのである。〈朋友の信義〉という〈美談〉の影には、もうひとつ、正義希求、抵抗の精神が隠れている。このことはすでに教科書発行時において注目した人がいた。明治45年に発行された「高等小學読本教授参考書」（荻野素助、入江保）である。（したがってこの参考書もまた国定教科書より先に出版されたことになる。）「第三課 眞の知己」の「或罪に依つて、國王の前に引き出されて、死刑を言渡された」という文について「これは暴君デオニシアスを殺しに行つた罪であるけれども、こんな事は国体に合はぬから或罪としたのである。子供には知らせない方がよい。」⁸⁹と忠告しているのだ。高等小学校1年生くらいになれば、人格すぐれているに違いないピチウスが死刑とされる理由に不審を抱く生徒があっても不思議はない。「暴君」に対する抵抗の行動だったという指摘である。太宰治が意図したとされる〈美談〉ではあるが、それは決して単なる友情と信頼だけの物語ではない。「解決のむづかしい問題」（「新ハムレット」）、「国体に合はぬ」ような意図もはらむことができた〈美談〉だったのである。王がメロスの命を山賊にねらわせることによって、王の悪辣さが強調される。バニムの劇における刺客12名の意味と同じである。若い安達峰一郎がすでに物語の政治的な側面をとらえたように、太宰もまたそれをとらえた。それはまたシラーの本質によく従うものになったのである。

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

(註)

1. 小田島雄志訳「シェイクスピア全集」(白水社)第1巻、1978、p.268
2. 「世界文学大系」12(シェイクスピア)(筑摩書房;中野好夫訳)1967、p.206(「ハムレット」は三神黙訳)
3. 近藤周吾:「走れメロス」評釈(一):「太宰治研究」15(和泉書院、平成19年)p.191
4. 筑摩書房「太宰治全集」(第十次)第4巻(1989年12月)、p.385(「解題」):以下においてこの全集からの引用は原則として本文中で、巻数とページ数を示す。上記の場合は(4, 385)となる。
5. 浦口文治「新評註ハムレット」三省堂、1932、p.150
6. 浦口、上掲書、p.150
7. (坪内逍遙訳)「ハムレット」早稲田大学出版部/富山房、明治42年12月、p.136。(ただし太宰が引用したのは昭和8年、中央公論社「新修シェイクスピア全集」第27巻であろうという。太宰治全集第4巻p.391の「解題」参照)
8. 浦口、上掲書、p. I
9. 浦口、上掲書、p.50
10. 浦口、上掲書、p.179
11. 堤重久「太宰治との七年間」筑摩書房、1969、p.8
12. 浦口文治「新訳ハムレット」三省堂、昭和9年2月、p.282
13. 浦口「新評註」p.150
14. „Grimms Kinder-und Hausmärchen, Nachweise und Kommentare“ Diederichs Verlag, 1996, S.75
15. 「イソップ寓話集」(山本光男訳)岩波クラシックス46、1983、p.29
16. 坪内、上掲書、p.15
17. 坪内、上掲書、p.15
18. これについては奥村淳「カフカと太宰治、—「花火」と「変身」について—」(「東北ドイツ文学研究」30、1986)参照
19. 小山清「二人の友」審美社、1965、p.99以下
20. 小谷野敦:恋愛と論理なき国語教科書(「文学界」2002年5月号、p.161;特集:漱石・鴎外の消えた「国語」教科書)
21. 太宰治全集、第4巻、p.396(「解題」)
22. 太宰治全集、第10巻、p.381(「『猿面冠者』あとがき」;昭和22年1月)
23. 第十一次太宰治全集、第4巻(1998年7月)p.301
24. 「太宰治大事典」(志村有弘・渡部芳紀編)勉誠出版、平成17年、p.570
25. 近藤周吾:「走れメロス」評釈(三)(「太宰治研究」17、和泉書院、平成21年、p.324以下)
26. ヒュギーヌス(松田治、青山照男訳)「ギリシア神話集」(講談社学術文庫、2005)p.334以下
27. ヒュギーヌス、上掲書、p.338
28. ヒュギーヌス、上掲書、p.309以下
29. 「キケロー選集」第9巻(中務哲郎、高橋宏幸訳)岩波書店、1999、p.301以下
30. 「キケロー選集」第12巻(木村健治、岩谷智訳)、2002、p.317以下
31. 高橋康也・樺山紘一「シェイクスピア時代」(中公新書、昭和45年)p.50
32. Schillers Werke, Nationalausgabe, Weimar, 1977, Bd.29, S.168f.
33. Schillers Werke, a.a.O. Bd.24, S.268.
34. Schillers Werke, a.a.O. Bd.24, S.273
35. Johann Wolfgang von Goethe, Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche, Artemis Verlag, 1964, Bd.20,S.624(この全集によれば手紙の日付は9月4日だが、9月5日とするものもある)
36. 小栗孝則訳「新編シラー詩抄」(改造文庫、昭和12年7月20日発行)p.419
37. 漣山人(巖谷小波)、霧山人編「独逸文壇六大家列伝」博文館(東京)、明治26年、p.171参照(「シルレル伝」;詩の表題のみ)

38. Huber: Wikisource (huber, ueber moderne gröÙe) で検索。
39. Schillers Werke, a.a.O. Bd.2, Teil II B (Anmerkung zu Band21) S.175 (同書は「功業名言録」と訳される場合がある)
40. 「高等小學読本 卷一」(著作兼發行者文部省) 大正4年1月30日翻刻發行(大正8年度臨時定価金拾五銭) p.7-p.9
41. 篠山晃三郎編「小學修身編 卷之二」p.27以下
42. 鈴木忠篤編「小學格言訓話 卷之二」p.22以下
43. 榎並則忠編「修身教育少年立志編」p.142以下
44. 森本園二「新編小學修身事实全書」p.16
45. リギヨル(前田長太訳)「正義」p.131以下
46. 三浦白水(吉兵衛)訳「西詩余韻」p.39
47. マーデン(中村敬三訳)「品性之修養」p.64
48. 秋元蘆風「シルレル詩集」(東京・東亜堂、明治39年1月) p.101
49. 三土忠造「西史美談」p.118以下
50. ボールドウキン(織戸正満訳)「(新訳) フェマス物語」(東京・日進堂) p.131
51. ボールドウキン、上掲書、p.132
52. ボールドウキン、上掲書、p.132以下
53. ボールドウキン、上掲書、p.133
54. ボールドウキン(近藤敏三郎訳)「新訳西洋五十名話」:「はしがき」
55. 後藤薫他「国定教科書に見えたる泰西教材の研究」:「凡例」
56. 後藤薫、上掲書、p.226以下及びp.230以下
57. 馬淵冷佑「高等小學読本参考」p.8
58. 馬淵、上掲書、p.9
59. 馬淵、上掲書、p.20
60. 「鈴木三重吉童話全集」第8巻、文泉堂書店、昭和59年、p.4
61. 「鈴木三重吉全集」上掲書、p.5
62. 「鈴木三重吉全集」上掲書、p.8
63. 関川夏央「本よみの虫干し」(岩波新書、2001) p.224
64. 秋元蘆風「評釈シルレル詩選」p.8(本文中に「保證」の原文及び文法解説掲載)
65. James Baldwin(後藤一郎訳註)「Fifty Famous Stories(フィフティ・フェイマス・ストーリーズ)」:「はしがき」及びp.168以下
66. 小栗、上掲書、p.263。第十次全集第3巻(p.424以下)の「解題」に小栗訳と秋元訳が並べて掲載されている。便利至極である。
67. 新関良三編「シラー選集(一)」富山房、昭和16年、p.293
68. 細谷博「太宰治」(岩波新書、1998) p.90
69. 手塚富雄・神品芳夫「増補ドイツ文学案内」(岩波文庫、1995) p.124
70. 菊地栄一他「ドイツ文学史」(東京大学出版会、1964) p.60
71. 菊地他、上掲書、p.61
72. 鼓常良「新訂ドイツ文学史」(白水社、昭和18年) p.280
73. „Die Zeit“ (13.August 2009, Nr.34, S.35) 独文学者にして作家である Rüdiger Safranski の言葉である。シラー生誕250年記念の特集記事。
74. 視而列爾著、山田郁治著「哲爾自由譚 前編」泰山堂(東京)明治15年10月:「諸言」
75. 正岡芸陽「新時代の道徳」前川文栄閣(東京)、明治36年、p.105
76. 堤重久:太宰治百選(「太宰治研究」審美社、昭和42年、p.26)
77. 藤沢周平「帰省 未刊行エッセイ集」(文藝春秋、2008) p.155

太宰治「走れメロス」、もうひとつの可能性

78. 杉森久英「苦悩の旗手太宰治」(河出文庫、昭和58年) p.9
79. 杉森、上掲書、p.11
80. 野原一夫「回想太宰治」(新潮文庫、昭和58年) p.29
81. 小栗、上掲書、p.469(「跋」)
82. 近藤周吾:「走れメロス」評釈(三)(「太宰治研究」17、p.325)
83. 司馬遼太郎「ニューヨーク散歩」(街道を行く、39)(朝日文庫、1997、p.85)
84. L.M.オルコット(清涼言訳)「愛の学園(小さき人々)」(杉並書店、昭和14年10月発行) p.400:「十四デーモンとピシアス」冒頭の詳細な「譯者註」(p.361)によれば二人は「信義の篤い友人」を意味しており、漢語の「管鮑の交」に同じという。これは浦口文治の「ハムレット」評註本と同じ例えである。
85. books.google.de では“Damon and Pythias”の1821年版(70ページ;ロンドン)と1860年版(76ページ;ニューヨーク)を掲載。引用はそれによる。
86. 小野正文によれば日本でも「走れメロス」のこの部分をカットした教科書があったという。(小野正文:「走れメロス」雑感;「太宰治研究3」審美社、昭和38年、p.14参照)
87. この事実は同僚の畏友澤田祐治教授(西洋法制史)のご教示による。深謝申し上げる次第である。
88. 「兩羽之燈」「第二号並号外」p.6(以下の引用はp.6-p.8)
89. 荻野素助、入江保「高等小學讀本教授参考書 前編」(甲府・荻野素助、明治45年3月発行) p.7:著者入江の住所は甲府市新柳町6番地である。昭和20年7月の甲府空襲で太宰一家が避難した先も新柳町6番地である。また印刷所は甲府市下連雀7番地の浅川活版所である。

Dazai Osamu „Hashire Merosu“ — neue Aspekte —

OKUMURA Atsushi

Hier soll versucht werden, Stoffe und Motive für Dazais Novelle „Hashire Merosu“ (Renne, Möros!) zu analysieren und anderes literarisches Material vorzustellen als bis jetzt. Dazai selbst hat am Ende dieser Novelle eine alte Legende und ein Gedicht von Schiller genannt, nämlich eine Fabel des griechischen Schriftstellers Hyginus und Schillers Ballade „Die Bürgschaft“ (später „Damon und Pythias“). Als Schüler soll Dazai in einem japanischen Lehrbuch diese Fabel gelesen haben.

Doch gibt es Elemente, die weder bei Hyginus noch bei Schiller gefunden werden. Diese sind bei einem irischen Dramatiker zu finden. Es handelt sich um John Banim (1798-1842) und seine Tragödie „Damon and Pythias“ (1821). Dazai hat anscheinend aus Banims Drama Handlungen entliehen. In diesem Drama werden von König Männer geschickt, um Damons Rückkehr zu behindern. Bei Dazai hält „Merosu“ die Räuber, die ihn angreifen und ermorden wollen, für königliche Soldaten. In Pythias kommt ein Zweifel an die Rückkehr seines Freundes auf, als der Sonnenuntergang naht und Damons Gestalt nicht zu sehen ist. Beide Freunde bei Dazai, „Merosu“ und „Serinunteusu“, fangen aneinander zu zweifeln an. Banims Tragödie hatte auf Dazais „Hashire Merosu“ unmittelbaren Einfluß.

Weiterhin wird versucht, Schillers Ballade „Die Bürgschaft“ und Dazais „Hashire Merosu“ vergleichend zu analysieren. Daraus geht hervor, dass Dazais Novelle nicht nur eine „bidan (美談)“, also eine anrührende moralische Fabel, sondern auch eine politische Orientierung enthält. Für Dazai war Schiller vor allem der Dichter der „Räuber“. Dazai habe sich selbst, nach seinem jungen Anhänger Tsutsumi, als einen der Räuber erkannt. Schiller wird immer noch als „Der Schriftsteller der Freiheit!“ („Die Zeit“ / 13. Aug. 2009 ; Nr. 34) geschätzt. Schillers Drama „Die Räuber“ hatte eigentlich einen Nebentitel „gegen Tyrannen“. Es ist nicht zu übersehen, dass Dazais Novelle mit eindrucksvollen Worten beginnt. Diese Worte zeigen eine politische Orientierung der Novelle. „Man soll den übelsten und höchst tyrannischen König beseitigen.“ Ganz scharf hat ein Herausgeber des Schultexts vor dem Helden Damon gewarnt, weil diese Person eine Art Hochverrat unternommen hatte. Diese Tat würde das nationale Wesen der kaiserlichen Regierung erschüttern. Die Schüler sollten die Wahrheit des Helden nicht lernen. Mit diesem Attentat beginnt sowohl die Fabel von Hyginus als auch die Ballade von Schiller, dem „Dichter der Freiheit und Revolution“. Diese Tatsache soll nicht übersehen werden.